魔法少女リリカルなのは～神様の力を得た少年～-Ｒｅｔｕｒｎｓ-

秋風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～神様の力を得た少年～－Ｒｅｔｕｒｎｓ－

【Ｎコード】
Ｎ１３２７Ｔ

【作者名】
秋風

【あらすじ】
良いことがある後には必ず不幸が待っている。自分の生を終えてしまった少年、神谷迅は異世界へと転生を果たす。それは何故か？それは「世界の意思」。そして運命。世界に選ばれた少年の物語と運命は動きだす。
秋風の「神の力を得た少年」の再筆小説になります。
※注意！この小説には原作崩壊、原作改竄など、原作愛読者には好ましくない表現や内容が多々含まれる場合があります。それを了承

した上でこの小説を読むことをお願いします。誤って開いた場合は
×ボタンにて消すことをお勧めします。

Prologue～Beginning of the world～（前書き

どうも、秋風です。神の力を継ぐ者たちに代わり、新たに再録した神様の力を得た少年―Returns―です。ぶっちゃけ言いましょう、かなり前と違います。迅の印象が凄く変わってしまいました。誰これ？と思う方も多いでしょうが、間違いなく迅です。

ではでは、新たな神様の力を得た少年をご覧あれ・・・

Prologue～Beginning of the world～

世界とは何か？
――人間の個人や集団が所属したり活動したりしている、物理的、社会的、心理的な空間を意味する多義的な言葉であり、宇宙の全て、全ての国、人間の社会全体、文化文明の共有する人々のまとまりのこと

では世界には意思があるのだろうか？世界は何を求めるのだろうか？世界という名の一つの個体を支える者。世界はそれを欲する。

その個体とは何か？
――それは「神」と人々が崇める存在のこと。神の存在は人々の心に安定をもたらし、信仰という一つのファクターをもたらす。
ではなぜ神を作り出そうとするのか？そして世界は何故神を作り出したのか？
――それはその『世界の意思』だからだ。世界が望むのは自身の平穏。人々の平和・・・それには絶対の力が必要なのだ。何にも揺るがない存在。それがなければ、可能性なき世界は消えて行く。無限に別れ、無数に存在する『平行世界（パラレルワールド）』。

もし、もしも、もしかしたら、かも、だったなら、そんな別の可能性の世界は無限に枝分かれを続け、その世界は懸命にその自身の意思を保とうとする。だが弱き意思は消えて行く。そして稀に世界が導き出す答え。それは『並行世界』からの力の参入と器の作成。互いの世界の意思が絡み合い、器を選び出して力を与える。そして人々はそんな器を神と崇め、信仰を捧げて行く。そして世界の作り出す器はこうも呼ばれる

転生者

世界の見せるまか不思議な非日常・・・器に選ばれし少年の物語

とくとご覧あれ・・・

Prologue～Beginning of the world～（後書き）

というわけで、かなり前回と始まりが違います。結構ギャグが減った感じです。何故こうなったのか・・・

Next story Chapter 1 01「The boy spins the world」

01：「The boy spins the world」（前書き）

というわけで、いきなり第1話です。とりあえず溜めてる分を何日かに区切って出していく予定です

相変わらずの駄目文ですが、よろしくお願いします

01:「The boy spins the world」

Side??

・・・・・今日は、本当に運がいいと思っていた。欲しいものが買えて、当たりとかもあって、何もかもが上手く言ったと思っていて・・・これだけ良いことがあったら多分悪いことも起こるだろう。そう思っていた。思ってはいたけど・・・

「これは、ないだろ」

俺が見つめるのは俺自身。血まみれで頭が潰れている。はっきり言って気持ち悪い。現在の状況と言えばドラゴンボール的な感じで浮遊している。周囲では救助隊員、警察、野次馬が騒いでいる。まあ、即死・・・だしな。鉄筋コンクリートが頭に当たればそうもなるだろ。せっかくアニメイトで買ったグッズもパァ・・・か、恨むぜ神様

「案外、落ちついていますね」

「・・・？」

そこにいたのはピンク色の髪に白い翼を生やした女性。天使か？

「初めまして、天界に仕えし天使『レナ』と申します」

「どうも、神谷迅です」

ご丁寧に挨拶を交わす。さて、何故落ちついているか・・・？答えは簡単だ。最初の数分ははっきり言ってパニックになった。自身の現状を見て吐きたいとも思ったがこの体では嘔吐など出来ることも

なく、ただ呆然と見守るだけ。人の騒ぎが大きくなったところで我に返っただけ。俺の人生はここまでか・・・はぁ

「では、天界へとお連れしましょう・・・準備はよろしいでしょうか？」

「まあ、この世の未練は・・・・・・」

いっぱいあるな・・・

「まあ、準備とかは一応聞いただけです。行きましょう」

こうして俺はレナと名乗る天使に連れられ天界へと行くこととなる。空を抜け何かの空間を潜り抜けて行った。

Ｓｉｄｅレナ

何なんでしょう、この子は・・・事故で死んでしまったのにも関わらずこの表情。普通ならもっと自分の生にしがみ付きたいと思う人が殆ど。こんなに落ちつくのっておじいさんとか高齢の方だけのはずなんだけど・・・ま、いいか

「そう言えば神谷さん」

「はい？」

「この後はどうしますか？」

この後、というのは六道輪廻のこと。人々は運命を廻り、魂は廻り

続ける。それはどんな世界になるのかは分からない。その時の記憶は消え、残るのは残滓だけ。過去にここにいた気がする、来た気がする。これは人が言うデジャビュのこと。人だった時、動物だった時、虫や物だった時でさえ、記憶というのは形を形成して残って行く。もしくは私のように天使になるか・・・私が天使になってまだ数百年だ・・・こんな子、初めて見た気がする。まあ、一応聞いてはいるけど判断は全て天界のいずれかの神様が行っている。

『レナ』

突然頭に通信が入る。この声は私の上司だ・・・

『はい、アテナ様』

念話(テレパシー)で受け答える私。あの子は周りをキョロキョロ見てるし、大丈夫でしょう・・・

『今回はまた・・・厄介な子を連れてきちゃったのね』

は?私は普通に天界から下界へ巡回してるときに見つけただけですけど

『まあいいわ・・・すぐにその子を連れて来て頂戴。私が個人的に用があるわ』

『了解いたしました』

未だにキョロキョロと物珍しそうにあたりを見回すあの子。確かに不思議な感じです

「あの、神谷さん」

「はい？」

「アテナ様が会いたがっております。ついて来ていただけますか？」

Ｓｉｄｅ迅

突然の話だ。アテナってあれだろ？ギリシア神話の女神・・・知恵、芸術、工芸、戦略を司るギリシア神話の女神で、オリュンポス十二神の一柱だったけか？処女神としても有名だな。その辺しか知らないのが正直なところだ。でもその女神が俺に何の用だ？

「いいですけど」

「ではこちらへ」

いったい、その辺の人間の俺に何の用が？しばらく歩くと部屋に通された。そこにいたのは紅い髪が美しく輝く女性。腕にはメデューサの首が付けられた盾（アイギス）を持つ女性だった。

「初めまして、アテナです」

「神谷迅です」

丁寧にお辞儀。相手は仮にも神様だ・・・下手なことを言って地獄に落とされたくはない

「別にそんなことしませんよ？」

「っ・・・！」

心を読まれるとは・・・神様ってなんでもあり？

「別に何でもありではありません、神として最低限できることです。まあ、それは置いておくとして・・・まあおかけに」

促されて席へついた。

「さて、貴方は疑問を持っているでしょう、何故自分が私に呼ばれたのかと」

「ええ、まあ・・・それなりに」

だって俺、普段から悪いことしてないよな？別にいいこともしてないし・・・うーむ

「貴方は転生をご存知ですか？」

「えっと・・・記憶を継承して生まれるっていうあれですか？」

「そうです。それを貴方にしてもらいたいのです」

突然何を言い出すんだ、この女神さまは・・・俺が転生する？どこぞの転生小説か？

「世界の行先は私にも分かりません。ですが、貴方がその世界の先で力を振るい、生き続けることを願うのならば・・・貴方が望むものが手に入ると思いますよ？」

「スイマセン、話がまったく見えないです。なんで俺が転生するんですか？そこの天使の人が言っていましたけど、六道輪廻に組み込まれるんですよね？」

「・・・・・そうです。そうなんですが・・・」

言いながら杖を取り出すアテナ様。何それ？

「これは選別の杖・・・次の運命を決める杖です。いろんな神様が持っているのですが、貴方には何故かこれによって運命が導き出せないのです」

説明によると、前世で悪いことをすればそれなりの運命が待っているのだという。例えば殺人を犯したり、人としての道に外れたりする場合、人以下の運命が用意される。逆に人として偉大なことを成し遂げたり、前世の運命が酷過ぎたり場合それは次によき運命を迎える。たとえば世界を変えた偉人・・・例を上げればトーマス・エジソンについて語るアテナ様。彼は今、天界でその現在の世界の偉大な発明を見届ける役目を果たすのだという。そして俺について。俺にはまったく運命が読めないのだという。何故なのか？理由を突きとめるためにも転生を進めたらしい。

「はっきり言いますと、貴方は特別悪いこともしてないし、偉大なことを成し遂げてもいません。しかし『輪廻を廻ることが出来ない＝消滅』です。ここに残るにはそれなりの力がなくてはならない」

力？

「そう・・・人はそれぞれ何かを成し遂げる力がある。強気力を得

た物はここに残る。その力は単なる力ではなく、人々のためにと思う力」

だからトーマス・エジソンはここにいれると？まあ、多分彼に限らずなんだろうけど・・・

「大まかですが、そういうものです。貴方の世界で名を轟かせた人達はだいたいここにいます。結論を言えば消滅か転生です」

「・・・まあ、個人的に消滅したくないです」

これは俺の本音だ。消滅したくない。どんな形でも良い、生きることができるのなら・・生きたい！

「貴方の願い、叶えましょう。さて・・・では行きます。準備はいいですか？」

「行くって言われても・・・」

心の準備もあるし、第一変な世界に送られて生きて行く自信ないぞ

「先ほども言いましたが、力は与えます。それが貴方のためにもなるのですから・・・さて、選定の杖よ、汝の力により彼の者の力を示せ」

選別ではなく選定らしい。何をしているんだ？

「・・・規格外な能力を秘めているのですね、貴方は」

まったくもって話が見えない。何のことだろうか？

「貴方の魂の奥に眠る力を引き出しました。力の名は『創造主(クリエイター)』」

「『創造主(クリエイター)』？」

「この能力は自身のイメージを具現化し、そのイメージ物と９９・９９９９９９％以下エンドレスのものを再現し作り出せます。例えばですが・・・貴方が何か漫画やアニメの力を使いたいと願うとそれは具現化され、貴方の元へ現れるという能力です」

「・・・チートだ」

「その通りですね・・・まあ『それだけ力を使える＝代償も大きい』と考えてください」

まあ、そんな力があるなら生き延びられるのかな？

「では世界へ送ります・・・貴方に加護があらんことを」

俺の視界は白くなり、段々と意識を奪って行った。

俺の物語が後にどれほど大きくなるかなど、この時は知る由もない

01:「The boy spins the world」（後書き）

Next story 02「Boy meets girl」

02：「Boy meets girl」（前書き）

シリアスを多くすると言いながらギャグが入ってしまう。
読者の皆さんに面白く読んで欲しいとは思っているのですが・・・
シリアスを増やせるように頑張ります

02:「Boy meets girl」

Side迅

「・・・・・・ここは」

目を覚ますと、何やら公園だった。時代的には現代だろう。異世界という実感がまったくわかないのが正直なところだ。公園の芝生で俺は寝ころんでいた。起き上がると何故か視点が妙に低い。なんだこれ

「・・・・・・・・・・ん？」

公園の中のアスレチックにあった鉄棒が俺自身を映し出す。歪曲して見えてはしまうものの、現在の状況がよーく理解できた。

「身体、縮んでいる？」

某名探偵の用に薬を飲んだわけではないが・・・これはひどい。身体を見るにふむ・・・7歳か8歳前後？ってところか。異世界へ来た影響なのか・・・身体が縮んでいる。元々魂だけだった俺だ・・・神様が考慮したのだろう。住む場所もないしなぁ・・・どうしたものか。それにしても身体が本当に軽いな。まずは力を使ってみるか？

「人は・・・いないな」

しかし・・・力を作ろうにもどうしたものだろうか・・・何かをイメージしよう。イメージするのは一本の剣。コンクリの地面に手を当てればそれは出てくる。これでいいのか？

「えい」

軽い気持ちで地面に手をついた。すると光が迸る。バチバチと音を立てて出てくるそれはまるで某錬金術師が成し遂げるようなものであった。一本の剣はイメージ通りに出来上がり、輝きを見せる。コンクリートで出来ていない・・・？そうか、イメージしたのは地面から出てくるという“出方だけ”剣という概念は鋼の物質で出来ているからか・・・つまり

「なにもない空間から、水が溢れだしたら・・・」

――バシャッ！

「おお」

ちょっとびっくりだが・・・これはこれで面白いな。力ってのは色々あるみたいだ。アニメや漫画も・・・つまりそれなりの装備を作り出し、映し出す。まるでＦａｔｅ／ｓｔａｙ ｎｉｇｈｔのエミヤだな。憧れだから某ってつけないけど・・・じゃあ？

「投影開始（トレース・オン）」

俺の手に宿る千将・莫耶。白と黒の夫婦剣。おお、すごい

「っと、こんなのを持っていたら銃刀法違反だな」

消えろとイメージするとそれはすぐに消え去り、最初にイメージした剣も消えていた。なんか、本当に何でもありなんだな。

「じゃあ一回やってみますかぁ・・・同調開始（トレース・オン）」

俺はイメージする。それは自身の自己解析。今のはちょっと雰囲気だ。

身体
正常　ただし年齢は7歳から8歳程度の身体
力
魔力が存在
魔力　Sランク
能力
異常なし、創造で99．99999999%の再現が可能
ただし能力は肉体年齢によって変化

・・・・・魔力？

「おいおい、どこの神様か魔王様の世界なんだよここは」

魔力なんてよくあるRPGとかしかないだろ。こんな現代の場所で魔力だと？世界で魔力があるものなんて・・・

――僕と契約して魔法少（ry

「ナイナイ」

イメージしかけて、それをすぐに辞めた。とりあえず本当にそうなったらごめんだ。今のは頭から抹消しておこう。さて、と・・・能力の確認はできたし、後は何をするんだろうか

「ひっぐ・・・えっぐ・・・」

・・・・・・ん？人いたのかよ。気が付かなかった。でもあの様子だとこっちには気が付いてなかったみたいだな。廻り確認したはずなんだけど・・・それにしても、俺の現在の肉体年齢より小さい子供だな・・・泣いているけど迷子かなんかか？俺はとりあえずその子に近づいてみた。

「なあ」

「ふぇ？」

とりあえず話しかけて見た。そして思考が止まる。待て、落ちつけ・・・クールだ、クールになろう。今目の前にいるのは誰だ？片方だけ結んだ女の子、否幼女だ。だがその子を俺は知っている。何故だ？理由は簡単だ、その子を俺はパソコン、テレビの画面、ゲームの画面で何度も見ているからだ。少女はなんだ？否、将来魔王、悪魔と称される、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩという単語を作り出した女性だ。では少女の名前は？否、それは高町なのはだ・・・もしかしてここは、魔法少女リリカルなのはの世界なのか？いや、もっとそう・・・リリカルなのはの並行世界、それがこの世界なのか

「さっき変なことをイメージしたからか・・・？」

「ふぇ・・・ひっぐ、お兄ちゃんなのはに何か用なの？」

おおっと、軽く現実逃避していた。今は現実に直視しよう。アニメの知識はあるぞ、まずこの年代のなのはは確か１人ぼっちで寂しくすごすんだったな。確か・・・父親の士郎が仕事先で大けがをして家計がどえらいことになるんだったけか・・・

「いやその、どうしたんだ？迷子か何かか？」

とりあえず理由は知ってるけど今話すと面倒くさいことになるな。

というか、話す必要性ないし

「ううん、違うの、なのはは迷子じゃないの・・・1人でいい子にしているの・・・」

いい子にしてるって・・・おいおいおい、泣きながら言われてもなぁ

「よいしょっと」

隣に座る。畜生、椅子がでかい・・・早く身体よ、頼むから成長してくれ。ろくに椅子にも座れないなんて、チートな能力持っていてもむなしくなる。

「じゃあここで1人、誰か待っているのか？」

「ううん、違うの・・・お家は喫茶店だから、お母さんたちは忙しいの・・・」

それって邪魔になるから1人出て来たっていう感じだぞ。それはいい子に見えるかもしれんが・・・

「そっか」

俺は一言言って頭を撫でる。うむ、幼女万歳。こういう小さい子の相手は昔から元来得意だ。身体の年齢が変わっても思考を張りめぐらせればなんとでもなるだろう。

「ふぇ？」

「よかったら一緒に遊ぼうか？ここでずっと泣いていてもいいことなんかないぞ？」

「いいの・・・？」

普通なら「うん、遊ぶ～！」か「やだ」とか言いそうだけど、疑問形で返されるとは・・・さすがだな

「俺は別に用もないから」

「私は高町なのはなの・・・お兄ちゃんは？」

そういえば自己紹介してない・・・とりあえず前世の名前でいいか。いや、いいのか？俺・・・・・・まあ、良いだろ。

「俺は神谷迅・・・よろしくな」

そう言って手を取る俺。小さな手はとても綺麗で白く輝く。いかん、変態の考えだ・・・落ちつけ俺。とりあえずなのはの表情が泣き顔からちょっとだけ明るくなった。なんとも泣きやむのが早いことで・・・多分、家で我慢するうちに涙の出し方や止め方を覚えてしまったんだろう。

「何して遊ぶ？」

「えっと・・・」

もじもじしながらいくつか指を指すなのは。アスレチックで遊んでみたいということだろう。平日の昼過ぎ・・・5歳だよな、幼稚園って行っているのかな？それとも今日は休日か？まあどっちにしろ一緒に遊んであげる方が先か・・・・・さあ、遊ぼう

――2時間後

俺はなのはと遊びつくした。その辺で拾ったボールで遊んだり、アスレチックで遊んだり。さっきのなのはとは打って変わっていた。なんとも元気でチョコチョコ走りまわる。それに追いつかなきゃいけない俺も俺で大変なんだが・・・まあいいだろう。日は沈んできていた。夕日は綺麗に海を染める。そろそろ帰ってもらった方がいいよな？

「なあ、なのは？」

「なあに、迅お兄ちゃん」

「そろそろ家に帰ったらどうだ？」

俺の一言で、笑顔で振り向いたなのはの顔がまた悲しくなっていた。ずっといてもいいんだが・・・俺は寝泊まりする場所を探す必要があるしな。何より母親と兄と姉が心配するだろうに

「家の人だって心配してるはずさ」

「・・・・・・・・・やだ」

長い沈黙の後、なのはが一言そう言った。

「なのは？」

「だって・・・お母さんも、お兄ちゃんもお姉ちゃんも、なのはのことなんか必要ないもん。それだったら迅お兄ちゃんといる」

おう・・・なんという涙目・・・振り出しに戻っちゃったよ。どうしたもんかなぁ・・・

「わかったよ、じゃあもうちょっとだけ、一緒にいようか？」

「うん」

そのうち多分・・・御迎えくらい来るだろ。流石に心配しない親や兄弟はいないだろうしな。それからしばらく遊んだ後、疲れたので休憩。公園の時計は６時を回った。ベンチで静かに眠るなのは。よほど人と遊んだのが楽しかったのだろう。日は落ちて、すっかり暗くなった。さて、どうしたものか・・・おや、あそこに見える女性は・・・

「なのはー？なのはー！どこなのー？」

多分、母親の桃子さんだね。魔王の起源とも言われあらゆる漫画でも夫が勝てない妻として名高い桃子さんじゃありませんか・・・

「あら？なのは・・・と、貴方は？」

俺の存在・・・まあ隣にいたしな。俺に尋ねる桃子さん

「ああ、なのはのお母さんですか？」

「ええ、そうよ・・・もしかして、なのはの面倒を見てくれていたのかしら？」

「ええまあ・・・一応夕方に帰るように促したんですが、聞いてくれなくて」

俺が言うと、桃子さんは申し訳なさそうにしている。

「ごめんなさいねうちの子が・・・お家の方もご心配なさるでしょう？」

「え・・・ええ、まあ・・・」

目を逸らさざるを得ないな・・・言えない、口が裂けても転生して気が付いたらここにいただなんて、絶対に口が裂けても言えんぞ

「とりあえず・・・なのは、なのは」

「うにゅ・・・迅お兄ちゃん、なあに？」

「ほら、お母さん迎えに来たよ」

俺が言うと、驚いてなのはが桃子さんを見た。そりゃ驚くわな

「おかあ、さん・・・」

「もう、なのは？心配したのよ・・・？さ、帰りまし「やだ！」え

っ・・・」

5歳児とも思えない握力で俺の腕と服を握るなのは。イデデデデデ！

「なのはお家に帰らない！」

「ど、どうしてなのは・・・ご飯も出来ているのよ？」

桃子さん焦ってる焦ってる。そりゃ焦るわ。自分の家の末っ子がいきなり他人の家の子供の服と腕握って涙目で自分のこと睨んでるんだもの。そりゃびっくりするわ。

「お母さん家だとなのはのこと構ってくれないし、お兄ちゃんやお姉ちゃんだってお店のお手伝いして・・・なのはなんてあのお家にはいらないもん！」

・・・あれ？さっき1人でいい子にしているって言ってなかったけ？もしかして俺に嘘をついてた？この子5歳にして嘘もつけるの？どんだけたくましく生きようとしているの？嘘ってたくましいって言えるか？まあそれはさておき・・・多分今までのが爆発したんだろうなぁ・・・1人でいい子にするというなのはの概念が、俺というイレギュラーによって潰れたわけか・・・これが俗に言う『原作ブレイク』ってやつなのか？まあそれはそれとして・・・

「なのは・・・」

悲しい目で見ている桃子さん。そりゃそうか・・・さて、どうしようかな。いやホントに。なのはが服を掴んで離さないし、桃子さんは桃子さんで怒っていいか迷っているし・・・うーむ・・・・・・

ん？ポケットに何かを見つける。これは・・・鍵？家の鍵と一緒に住所が出てくる。イメージ開始・・・

Ａｎｓｗｅｒ　神様が設置できるようにした自宅

わーい！ご都合主義万歳！神様どの世界に飛ぶかもわからないのにそんな設定してたんだぁ！多分俺に能力のっけて一緒に飛ばしたんだろうな・・・さて、と。一回お互いに落ちつく必要があるんだろうな

「あの、なのはちゃんのお母さん？」

「何かしら？」

「一回、うちになのはちゃんを預けて見ますか？」

「え？」

俺の一言に固まる桃子さん。そりゃそうか・・・俺はとりあえず言葉を続ける。

「今の状態じゃ多分なのはちゃんは俺から離れませんし・・・今日は家に人もいないのでウチの迷惑はありません。今日会って間もないですが・・・信頼していただけるのならば、うちで一日なのはちゃんを預かります。お互いに思うところもあると思いますけど、今の状態じゃお話なんてできないし」

間違ってもＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩじゃないからね？お話だからね

？肉体言語でこの年齢で分かりあうなんて無理だろう。桃子さんはしばらく考えている。そりゃそうだ・・・いきなり会った他人がなのはに懐かれていて、お持ち帰り・・・ゲフンゲフン！泊まるかどうか発言・・・疑うのも無理はない。

「・・・なら、1日お願いできる？」

・・・OKしちゃうんですね。まあ、高町家の人間に手出しなんてしたら多分塵も残らず消滅の道をたどるだろうけど・・・というか、俺にそんな度胸はありません

「自分で言うのもなんですけどいいんですね？」

「ええ、うちの主人以外になのはが男の人に懐いているなんてびっくりしてるくらいなの。信頼するわ。何かあったらすぐに私に連絡を頂戴」

そう言って渡される名刺。一応店長代理だから持っているんだろうな。

「じゃあこれ、うちの住所なんで」

そう言って俺はそれを渡す。もちろんイメージしてコピーはしてあるから問題もない。こうして桃子さんは「なのはをお願いね」と言い残して去って行った。

「じゃあなのは、うちへ行こうか」

イメージして道路を割り出す。ふむふむ・・・

「うん」

こうして手を繋いで夜の街を歩く。正直なところ夜の街を１０歳未満が歩くの超危ないよね。よい子のみんなはお母さんやお父さんと歩くんだぞ？一応マンションにはついたが・・・

「デカ・・・」

思わずそんな声が漏れた。まあいいだろう。

「お兄ちゃんのお家大きいの！」

いや、別にこれが全部ウチじゃないです・・・ま、いっか。ここの２０階・・・最上階っすか。俺高い所苦手なのに・・・

「さてと・・・」

鍵で自動ドアを解除してから２０階まで行く。部屋はここだな。鍵はこれと・・・

「ただいまー」

帰ってくるはずのない声。前世も一人暮らしだったしな

「お、おじゃましまーすなの・・・」

電気を付けると、そこは高級マンションの部屋であった。家具なども、何から何まで高そうなものばかり。でもこの部屋の構造や家具、どこかで見たな・・・ん？もしかして

「ここ、俺の家？」

一人暮らしをしていたころ、住んでいた・・・まあ、つい最近だけど。その部屋とほぼ同じ。ちょっと豪華なくらいで。なんだよこのサービス精神

「夕飯・・・イメージしてみるか？いや・・・」

冷蔵庫の中はまあ、なんかしらある。なんか作ればいいか？流石に食材をイメージするのは難しい。食材の特徴、特色、食感など、個人によって変化する物はイメージしないほうがいいだろう。とりあえずいくつか材料を取り出し、料理に取り掛かる。放任主義だったウチの親のおかげで料理はある程度出来る。するとトテトテとなのはが近寄ってきた。

「迅お兄ちゃん、何か手伝えることある？」

「・・・うーん、じゃあお皿を一枚一枚、割らないように運んでくれる？」

「うん！」

流石に「ない」なんて言ったらまた逆戻りになりそうなので・・・もう色々と気を使うなぁ・・・まあ、良いだろう。

「さて、と・・・」

料理を順調に作りながら考える。この先の未来、俺は変えるべきか？「魔法少女リリカルなのは」という世界の中にいる俺。経緯は分からない。どうして俺はここにいるのか？何故輪廻に照らし合わさ

ることがなかったのか？自身で考えても分からないことだらけ。危険は多いし、目の前の火の粉を振り払う必要も出てくることだろう。どうしたものやら

「っと・・・そろそろだな」

夕食メニューは簡単な肉と野菜の炒め物。まあ、他に作るもんもないしな・・・とりあえずはこんなところ。ご飯をよそい、整える。

「さて、できた」

「わぁ・・・」

なのはの目がキラキラしている。料理は得意というわけではないが、それなりだ。

「それじゃ」

「「いただきます」」

こうして食事。ぶっちゃけ言って材料はなかなかのものだ。うむ、上出来だ。なのはもおいしそうに食べている。これならいいか。量もちゃんと子供の量にしているし、余ったら朝食べればいい。食事を終えてから一息・・・そろそろ風呂入って寝ないとな・・・なのはも寝てくれるだろう

「なのは、お風呂入ってきなよ。沸いてるし・・・後はうん。これはタオルと着替えだよ」

イメージでパジャマ作成。パンツは流石に無理だ。人として・・・

色々と大切な物を失いそうだ。タオルを出すと、なのはが何やらもじもじとしていた。

「あの、お兄ちゃん・・・」

「ん？」

「一緒に、入ろ？」

グブファァ！な、なんだこの可愛生物！？くっ・・・理性が飛びそうだ・・・負けるな俺！

「そ、その、なのは？なのはのその、家族ならともかく・・・俺は一応友達とはいえ・・・その、だな・・・」

「だめ・・・？」

ぐ、ぐあああああああ！見た目は子供、中身は大人な俺にはこれは辛い！っく！ま、負けないぞ！

「駄目とかじゃなくてな？なのはは女の子だし、俺は男の子だ。だから・・・」

「迅お兄ちゃんは、なのはのこと・・・嫌い？」

ぐ、おぉぉぉ・・・俺のライフが、減って行く・・・もうやめてくれ！俺のライフは０だ！やばいぞ、転生して別世界に来た癖にもう人生が終わる・・・

「ねえ・・・・・・行こ？」

「・・・・・・わ、わかっ・・・・た」

こうしてお風呂に入ることになった俺。まあ８歳の身体と５歳の身体なわけで・・・間違っても問題は起きない。まあ５歳の身体で発情する俺ではない。なんというか父親って多分こんなんだろうという。よくよく考えれば多分未来のことを想像してあれだけ俺も否定したのだと思う。未来の姿は・・・ホント可愛いし。で、時間は９時過ぎ。５歳にはもう遅い時間だ。布団の中、すやすやと眠るなのは。何故かせがまれて一緒の布団である。やれやれ・・・

「よっと・・・」

手を出し、イメージする。出したのは安らぎを描く音を奏でるオルゴール。音楽は何故か『Ａｍａｚｉｎｇ Ｇｒａｃｅ』なんとなく、いいかなと・・・他にもいっぱいあったけど。とりあえず・・・

「今日は一杯寝て、良い夢見ろよ、なのは・・・」

頭を撫でると、嬉しそうになのはは笑っていた気がした。

02：「Ｂｏｙ　ｍｅｅｔｓ　ｇｉｒｌ」（後書き）

ギャグが所々にあるのは御愛嬌
いつものことです。シリアスに書いていたつもりだったんですがどうも曲がってしまう。もっと頑張ろう

ちなみにフラグが出来た様に見えますが、フラグというよりもなのはの観点からは現在「迅＝優しい兄の存在」この時期の恭也君は父のための復讐に燃え、燃えながら家の家計頑張ってるので構ってる暇なんてありません
なので、優しくしてくれる迅が兄という感じなのです
というか、５歳に恋愛フラグは流石に立てるのはおかしいので、そう言う解釈をしていただけると嬉しいです

Ａｍａｚｉｎｇ　Ｇｒａｃｅは私が好きな曲の一つです
祖父の死去後、最初に聞いた曲がこれでした。何かの特番かでやっていた曲で、当時小学生の私としては非常に心にしみわたった曲でした。確か「白い巨塔」のエンディングで使用されていて、とても印象に残る優しい曲です

ちなみに「Ａｍａｚｉｎｇ　Ｇｒａｃｅ」はジョン・ニュートンの作詞による賛美歌・ゴスペルの名曲です。確か阪本　葵先生の作品「はじまりの魔法使い」でも歌詞が使用されていた気がします。
まあ、詳しくはググれば出てきますが、”ｇｒａｃｅ”とは「神の恵み」「恩寵」のこと。和訳例では「素晴らしき恩寵」だそうです

それはさておき、物語は加速していきます

Ｎｅｘｔ　ｓｔｏｒｙ　０３「Ｂｏｙ　ｔｈｉｎｋｉｎｇ」

03：「Boy thinking」（前書き）

今回はなのはとの出会いの後
色々と迅が無駄に一人ごとを喋ります。原作キャラがあまり出ないです。でも原作ブレイクは間違いないです
でもそれなりに頑張る迅の姿を見守ってくれれば幸いです

03:「Boy thinking」

Side 迅

次の日、身体を起こして目を覚ます。隣では将来有望な魔王となる少女、高町なのはが眠っていた。

「夢オチではなかった・・・と」

ため息を漏らして起き上がる。どうやら夢ではなかったらしい。昨日この世界へと飛ばされた俺は、高町なのはと出会い、家へと招いた。んでもって色々とあってなのはと一緒に寝たということだな。何このテンプレ展開？これは・・・高町家で処刑フラグが確定な気がするな。なのはが・・・家で余計なこと言わなければ

「それにしても・・・」

本編までは現在なのはが5歳か6歳だから・・・4年か5年？随分と時間がある。その間はどうするべきか？いや、そもそも・・・この世界で俺は何をする？この世界に介入するか？なんのために？俺はこの世界にいるからといって物語に沿って生きて行く理由なんてどこにもない。ならば関わらないというのも一つの手だ・・・しかし

「俺、この世界だと今8歳なんだよねぇ・・・」

生前は20代であるものの、現在は8歳。行動にはかなりの制限がつく。5年後は13歳・・・無印と呼ばれるアニメの物語が始まる時に俺が何をしていることやら・・・とりあえず

「徹底的にイメージを作り上げていくことにしよう」

さて、なのはを起こすかな。朝ごはん作ってなのはを家にまで送り届けないといけないし・・・いや、また駄々をこねるか？その場合はなんとかして説得しなきゃいけないよな・・・うーむ・・・

「とりあえず起こそう・・・なのは、朝だよ～」

「う、にゅ～・・・迅お兄ちゃん？」

「おはよう」

俺が言うと、ニッコリと笑顔を見せてくれるなのは

「おはよ～」

「顔を洗ってきなよ。タオルはコレね」

俺はイメージで作ったタオルを渡す。なのはもそれを嬉しそうに受け取る。タオルはピン色の可愛いタオルだ

「うん！」

トテトテとなのはは洗面台へと向かって行った。とりあえず朝食を作ろう。パンと、目玉焼きと・・・ソーセージ、サラダ、スープと、まあこんなところだ。うむ、上出来だ。なのはも戻ってきて手伝いをしてくれる。うむ、なのははいい子だ。食事の準備が整い、椅子に座る。

「じゃあ食べようか」

「うん！」

「「いただきます」」

こうして食事を始める俺となのは。さて、どうやってなのはを説得しようかな・・・色々となのはも思うところがあるし、現在の高町家でも色々と問題があるのはまた事実だしなぁ・・・桃子さんのあの余裕のなさも、アニメじゃ見ることができないほどやつれている。なのはが負担なのは事実だし・・・兄と姉の恭也と美由希も色々と大変そうだ。まあ、とりあえず家には引っ張らないといけないしな

「なあなのは？」

「なあに？お兄ちゃん」

食事を終えてひと段落しているなのは。俺が色々考えているのにキミはのんきだな。

「どうしても家に帰りたくない？」

「・・・・・・うん」

ちょっと暗い顔になった。そりゃ昨日あんだけ駄々こねたもんな、当然だ。だけどとりあえず・・・

「でもね、なのは・・・桃子さんは昨日本気でなのはを心配していた。なのははそれでも帰りたくない？」

「でも・・・おうちにいたら、なのは一人になっちゃう」

そうだった・・・だからいらない子、か・・・幼い故に家族の力に慣れず、確か・・・一人で寂しくリビングでジュースを飲んでいたっけな。でもここにいて全てが解決するというわけでもない。妥協案を出してなのはに納得してもらうということにしよう。これは高町家の問題であり俺が介入するというのはお門違いだ。まあ、家にテイクアウトした時点で色々と間違っている気もするが・・・そこは置いておこう

「・・・でも、今までなのはのことをお母さんたちはいらないって言ったかな？」

「・・・・・・・・・・・ううん」

そりゃそうだよな。でも、アニメとかでも構ってあげられないことを桃子さんは悔いていた。でも現状じゃその忙しさをカバーできないし・・・うーむ・・・・・・む？つまり、その大本の原因となった士郎さんの傷を治せば済むんじゃね？

「お母さんは好き？」

「うん・・・好き」

「なら、お家に帰ってごめんなさいしよう。お家でいい子にしていれば、お父さんだってすぐによくなるさ」

「本当？」

と、なのはが聞いてくる。とりあえずどうしてお父さんのことを知っているのかなどは聞いてこないだろう。なにしろ5歳だからな。

とりあえず朝食後、食器を洗って家を出た。なのはと手を繋ぎ、翠屋へと向かう。もちろん海鳴の地図をイメージして作ってあるので問題なく道には迷わない

「さて、着いた」

翠屋と書かれた看板。店に入ると、桃子さんがいた。

「いらっしゃいませ～・・・あ、なのは」

「お母さん・・・・・その、ただいま」

なのはが言うと、桃子さんは笑顔だった。

「おかえりなのは」

今は人が少ない。まあ、問題はないだろう。とりあえずなのはを送り届けたのでミッション完了。あとは士郎さんのところに行ってみるか。

「じゃ、僕はこれで」

「あ、待って・・・えーと、神谷君」

「はい？」

「よかったらケーキを食べてかない？御馳走するわ。なのはもお世話になったことだし」

うーむ、確かに魅力的なお誘いではあるが・・・この後やることも

あるので

「すみません、この後予定が入ってまして・・・申し訳ないですけど、お断りします」

「あらそう・・・じゃあまた来てね、待ってるわ」

「ええ」

と、俺が返すとなのはが不安そうに俺を見ていた。

「お兄ちゃん、行っちゃうの？」

畜生、相変わらず可愛い生き物だな・・・俺のＨＰ（平常心ポイント）がどんどん削られて行く・・・心にディバインバスター連射されているような感じだ。

「ああ、ちょっと予定が入ってるからね。でも大丈夫、また会えるさ。ウチまでの道は覚えただろう？」

「うん」

「ならまたおいで、待っているからな」

「うん！」

こうして翠屋を後にする俺。恭也や美由希がいなかったが・・・学校なのか？まあいいや

桃子ｓｉｄｅ

なのはが帰って来てから、少しお店に余裕があるからなのはと二人で話をした。今は少し忙しいけど。きっと家族みんなで一緒にいられる日が来ると。なのはに寂しい思いをさせているのは事実。なのはにあんなお友達ができたことは、とても嬉しかった。それにしても、とても優しい目をした子。昨日何故かそれに惹かれてなのはを預けてしまった。あの眼、昔の士郎さんそっくりね・・・だからかしら、見ず知らずの子になのはを預けることなんて、普通そんなことは絶対にしない。

「さて、と・・・」

休憩も終わったし、なのははお昼寝をしたし・・・もう一仕事、頑張るとしましょう。夜にはなのはのお話も聞きたいから。

迅ｓｉｄｅ

俺は海鳴市内の病院へ向けて歩いている。病院までの道のりもよくわかる。昨日地図を色々見たしな。見て見ると結構海鳴って大きい。それにしても身体が小さいのは本当に不便だ。というか、休日の真昼間から8歳の子供がその辺ぶらぶらしてるのもなんか空しい・・・この世界で友達なんていないしな・・・ｏｒｚ

「さて、と」

そんなアホなことを考えながら病院到着。部屋を聞いて行こうとするも面会謝絶だと言われ、中に入ることすら叶わなくなった。しょ

うがないから帰ると見せかけて裏口から潜入。部屋はだいぶ上の部屋だ。ミッションスタートだ

ミッション：誰にも見つからず高町士郎の部屋へ辿りつき、無事に脱出せよ

というわけでスニーキングミッションを開始する俺。階段ならばある程度接触は防げるだろう。段ボールを装備する俺。確実に浮いてる。てか、病院の中でこんな装備は駄目だろ・・・

「さて、おふざけはここまでにしてと・・・」

なんやかんやで一人でボケと突っ込みを繰り返しているといつの間にか部屋の前にいた。人影はない。ようし・・・

「突入っと・・・」

中に入ると、それは集中治療室だった。思ったより重症だな・・・俺はイメージして身体に着いた菌を消し去る。そして中へと入った。さて、どの辺が悪いというか・・・殆ど悪いな。身体がめちゃめちゃだ・・・治す方法は簡単。イメージする。ありとあらゆるアニメ、ゲームの知識を持つ俺。そして俺はそれを基盤にして『創造』する。名前はそうだな『エリクサー』ってのが一番いいかな？飲ませるわけにもいかないから振りかけると身体に適応していうタイプにしよう。これでよし・・・再生力は通常の２割増し。再生が終えれば効力は切れる。これで何とかなるだろう。あとは、士郎さんの気力次第

「よっと・・・」

作り上げた『エリクサー』を振りかける。すると身体は光出し、傷を消していく。意識がはっきりする前に戻るとしよう。それにしてもこんなに原作に介入していいのかな？俺

士郎ｓｉｄｅ

ここは・・・そうだ、病院だ。仕事で怪我をして・・・僕は、どれだけ眠っていた？身体を起こすと怪我はない。場所は集中治療室のはずだ。なぜ、こんなことに・・・？身体は何ともない。むしろ気分がいいが・・・

「・・・っ！高町さん！？起きて平気なんですか！？」

検診にきたナースさんだろう。驚いて僕を見ている。まあ、驚くのも無理はないが、とりあえず僕は返事をすることにした。

「え？ええ・・・」

「先生！先生～！」

・・・これは、説明するのに骨が折れることになりそうだ・・・

迅Ｓｉｄｅ

俺は病院を後に、自宅でのんびりしている。それにしても創造ってすると身体に負荷が途方もなく掛るんだな・・・身体がだるい。

「・・・眠い」

士郎さんの身体は治っている。見て見たが2日もあれば退院して店に復帰できるだろう。俺はこの世界でどう生きて行くべきなんだろう。こんな世界観をぶっ壊すようなことをしていいのかな？

「・・・どうせなら」

どうせやるなら本気で原作に介入するべきかもしれない。でもこの世界にいる以上、何かしらそれは意味を成している。本来の世界で輪廻の輪を廻ることがないと言われた以上、この世界にいることは俺にとって何か意味を成しているのかもしれない。

「でも、どうして俺はこの世界に来たんだろうなぁ・・・」

それが一番分からない。転生するということは別世界だ・・・別世界の理論は知らないけど、俺はアニメの世界に転生否、トリップしている。それも幼児化して

「ああくそっ・・・！考えれば考えるほどよくわからん！」

起き上がり、ため息。頭の悪い自分ではここまでしか考えをすることができないというのが本音。これから先この世界で起きるのは『ＰＴ事件』『闇の書事件』そして世界こそ違うものの『ＪＳ事件』そしてその先の未来に起きる『凶鳥』と元機動六課の戦い。

「・・・・・先の長い話だな」

そんなの何年も先の話だ。でもこんな考えはどうだ？俺はこの世界のなんかしらの修正をするために送られてくる・・・ならばこの世

界をまったく別の方向へと向けて行くことで、俺は異物として元の世界へと送り返されてしまう。という仮説・・・

「いやまて、そんなことしてもまたあの天界へ戻るだけなのか？」

最悪消滅・・・なんてこともあるかもしれない。もう既にこの世界の歴史の軸を一個ずらしてる。俺となのはが出会うこと、そして士郎の回復・・・これによってなのはの幼少時代の孤独は消える・・・多分。となると？

「ＰＴ事件・・・・・・」

フェイトとの接触は難しい・・・接触しようにもまずプレシアの説得が必要だ。それにフェイトに会いに行っても使い魔の２人が怪しむだろうし・・・ここはスルーだな。そして一番面倒なのが多分・・・

「時空管理局・・・か」

能力に特化した俺を多分介入すれば勧誘してくる。でも断固として、子供の頃から働きに出るなどごめんこうむる。相手が強行してくればそれなりに対応するだけだし・・・当面問題はないし干渉する必要もないだろう。

「まあ、考えていても仕方がない・・・」

この世界にいる意味を・・・俺は見つけることにしよう

０３：「Ｂｏｙ　ｔｈｉｎｋｉｎｇ」（後書き）

というわけで、一人でブツブツ言ってる迅でした

前回では士郎の回復はなのはと友達になり、共に病院で士郎と会うという感じでしたが、色々と変えて見ました。

こうなると前回より迅が計画的じゃないことが良くわかる。なんて空しいｏｒｚ

Ｎｅｘｔ　０４「Ｆｉｒｓｔ　ｆｉｇｈｔ　ｂｏｙ」

04：「Ｆｉｒｓｔ　ｆｉｇｈｔ　ｂｏｙ」（前書き）

ということで初戦闘ですが、久々にライダーネタです。
前回もこの辺の話でライダー出したので、出してみようかということで・・・こういう主人公嫌いな人、ホントごめんなさい。でも一応迅が何故ライダーの力を使ったのか？その理由は私なりに書いてるので、読んでくれれば幸いです

前回の作品のレビューではライダーが知らないという意見ももらいました。ライダーファンの皆さんはどのあたりまでならわかりますか？
全てですか？平成だけですか？それともギリギリＢｌａｃｋＲＸですか？個人的にライダーを出すのは控えるつもりではいます

そして原作キャラがちゃんと登場します。

04：「Firstｔ ｆｉｇｈｔ ｂｏｙ」

少しだけ時が過ぎた。なのはは小学1年生。俺は9歳だ。高町家は士郎の怪我が治ったことにより余裕が持てるようになっていた。なのはもあれ以来来ていない。きっと父士郎や兄の恭也などに面倒を見てもらって俺のことなど忘れているのだろう。それはそれで寂しいが、元々俺はイレギュラーだからな。関わらないほうがいい・・・

「イメージ開始・・・」

一日一度、身体のイメージを作り出す。身体は前世と同じ年齢層。身体つき・・・それに変化させる。細胞が活発になるわけではない。たんなる変身魔法・・・それに近いものだ。

「ん！」

よし、完全に前世の俺だな。というのも理由がある。金銭的問題だ。バイトなど9歳が出来るわけがない。なので変身魔法で身体を変え、働いている。学校に行ってない分全然余裕だが、家賃や食費は大きい。一人暮らしはそこまでの負担ではないものの、やはり余裕は欲しい。

「さてと、行きますか」

ドアを開けて外へ出る。気持ちがいい。すると管理人さんとはち合わせた。

「おはようございます」

「ああ、響君。おはよう・・・迅君はどうしたい？」

「ああ、まだ寝ていますよ。僕はバイトなので、では！」

そう、俺はこの身体の時は響を名乗っている。神谷迅の従兄、神谷響。という仮の姿がある。それにしても・・・この体は便利だ。２階から落ちてもそれに耐えうる身体をイメージすれば無傷。川を走ろうと思えばそれだけの脚力をイメージすることで川を走る。本来の姿でやれば多大な負荷がかかるこれも、簡単にできる。これは『年齢層に応じた能力』を疑似的に感化し、作り出している。やろうと思えば何でも出来てしまう。だがリスクもある。この姿で能力を使うと必ずそのつけは後々出てくる。多大な疲労で１日起きることがない日もある。気が付けば２日経過するなんてこともざらにある。１９歳を超えた年齢層では本来の力が出せても、本来の身体が耐えられないからだろう。力を使うのもしばらく練習する必要があるようだ。

「今日のバイトは・・・っと・・・ふむ」

朝はコンビニのバイト、昼は休憩を取ってから度っかその辺の会社の窓ふき、夕方は塾の講師、夜は居酒屋のバイト。正直働き過ぎるとも思われるだろうが『疲れない』とイメージすれば簡単に疲れることはなく働くことができる。ある意味、無敵に近い。だが疲れないのは一定の時間だけ。あとでどっと疲れが来る。別に学校なんか行ってないしバイトも区切ってるので問題はないが・・・

「いらっしゃいませ～」

時間が経つのが凄く遅い。

「はぁ・・・・」

時間は・・・・１１時か。後１時間だな

「響君、そろそろ上がっていいぞ。次の人が来たからね」

「いえ、後１時間はさせてもらいます」

「そうかい、すまんね」

ここを経営するのは中年のおじさん。何かと俺に気を使う。年齢を詐称し、身分も詐称している身としては少々心苦しい部分はあるのだが、とりあえず助かってる。さて、次のバイトは・・・

少年移動中

午後

「おいぼーず！気を付けろよ！」

「うぃ～」

会社の窓ふき。結構高い。今日は１５階まであるビルの窓ふき。ぶっちゃけ怖い。一回落ちそうになってイメージして命綱を作ったことがある。誰も見られなかったのが幸いだが、うっかりしすぎていた。さて、もうひと頑張りだ

少年移動中

夕方

「で、あるからして・・・ここの数式は・・・」

勉強は苦手だが、相手が小学生と言うこともあってなかなか楽だ。
てか、こいつら小学1年生だよな・・・？なんでこんなに難しい問題やってるんだ？数式とか普通使わないだろうに
「次の問題だが・・・「キーンコーン」む、授業はここまで。次の問題は宿題だ」
こうして塾終了・・・あれ？あそこの金髪ってアリサ・バニングスじゃないのか？それと隣は月村すずかか・・・仲良く話しているところを見ると喧嘩はし終えた後。なのになのはがいない・・・なぜだ？

「神谷せんせー！」

「ん？」

「質問いいですか？」

既に俺の下にいるとは・・・やるな、なのは。授業中まったく俺に気配を見せなかったぞ・・・俺一応、教室は見ていたよな？てか、出席簿に・・・あった。見落としてた。

「む、どうした？何か授業で分からなかったか？」

俺が聞くと、なのはは首を振る。

「神谷先生は弟さんがいらっしゃいますか？」

丁寧に聞いてくる。つまりは響＝俺のことだろう。ここで頷くと後々面倒なことになってしまいそうだ・・・

「いや、僕に弟はいないよ？」

「そ、そうですか・・・変な質問してごめんなさい」

「いいや、気にしてないよ。それより来週までに宿題をしっかりな」

「はーい！」

こうしてなのはは退場。未だに俺のことを覚えているのか・・・少し、嬉しいな。でも1年生からもう塾に行っていたのか・・・早いものだ。俺なんて小学生の高学年からじゃないと行かなかったぞ。ま、いいか・・・

「夜は居酒屋のバイトだ・・・」

着替えて外へ出る。授業ではスーツなのだが、居酒屋でスーツはまずいだろう。

「・・・ん？」

外へ出ると、すずかとアリサが誘拐にあっていた。そこになのはの姿はない。たぶんあの子たちはリムジンを待っていて、なのはは歩いて帰るのだろう。ここから翠屋はそう遠くはない。車に押し込まれて発進するワゴン。どうしたものか・・・番号は覚えたが、誘拐ならすぐに行かなければならない。なんだかテンプレだな・・・な

んてメタ発言もしてみたり

「遊んでる場合じゃないな」

イメージ開始！

「その脚は車をも追い抜く！」

既に見えない車を俺は追っている。速いな・・・力を抑えているから見失いそうだ。人気のない路地へ入ると、再びイメージをする。

「その脚は飛蝗のごとし！」

足の裏に力を溜めて飛ぶ。ビルを軽々と飛び越え、ビルからビルへと飛び移って行く。ワゴンは小さい・・・このまま港まで行く気か？見失うわけには行かない・・・

「その眼は鷹のごとし！」

狙った獲物は逃がさない。モハマド族並みのこの視力なら逃がすことはない・・・なるほど、港の倉庫か・・・何人か見張りもいるな。一気に行くとしよう。俺は腕に力を溜める。倉庫の屋根から一気に入口にまで飛び移ると。戦闘態勢に入る。

「その腕は虎のごとし！」

全力で見張りを殴り飛ばした。なんで虎なのかって？なんかカッコいいじゃないか。それにこれでイメージが繋がる。鷹、虎、飛蝗！欲望と戦う仮面の戦士みたいだし。こういうのは好きだ。

「さて・・・」

中には見張りが数人。見るとすずかとアリサが縛られていた。廻りを取り囲んでるのは・・・人形？人ではない感じだ。それにボスみたいな男はなんか人というよりもまた違う感じだ。これはまさか・・・？

「夜の一族か・・・」

魔法少女リリカルなのはの原作『とらいあんぐるはーと』の設定では、確か月村家は吸血鬼、それに自動人形とやらも出現するんだったな・・・半端なイメージじゃ勝てないぞ！？どうする・・・

カラン

「っ！」

動いた瞬間、何かにぶつかった。鉄パイプのようだ。それの音を聞いて一斉にこちらを向いた。

「誰だ！」

っく！これは今日の居酒屋のバイトには行けそうにないな・・・

Ｓｉｄｅ月村すずか

アリサちゃんと友達になって数カ月。私はアリサちゃんと一緒に誘拐されてしまった。最初はただの誘拐かと思った。でも違う。この人とたちは人じゃない・・・別の何かだ・・・私と同じだ。アリサちゃんは気絶しているらしく声がない。目隠しをされていて何も見

えないけど、海の波の音が聞こえていた。アリサちゃんを巻きこんじゃった・・・お姉ちゃん・・・助けて・・・

「誰だ！」

男の声が飛んだ。私達にじゃない・・・一体誰？お姉ちゃん？ノエル？

「やれやれ、どうしたもんかな・・・」

聞いたことがある男の人の声だった

Ｓｉｄｅ迅

どうしたものか・・・自動人形ってかなりの戦闘力だろ？それにあの男・・・人じゃない

「おめぇ何もんだ・・・？てめぇも夜の一族か？いや・・・てめぇ、人間だな？」

「そうだ・・・なんか自分が人じゃないような言い方だけど？」

俺が言うと男はにやりと笑っていた。

「そうだ！俺は人よりすぐれ、進化した種！誇り高き『人狼』だ！」

この世界では出て来たことないけど、吸血鬼がいるんだ。人狼・・・詰まる話、狼男もいるんだろう。ふーん・・・てか、わざわざ正体を明かしてくださるとは・・・

「あんた、人じゃないわけだ」

「そうだって言ってるんだろ！お前はなにもんだ！」

「塾の教師だ！」

俺が言うと、人狼は切れた。

「知るか！結局ただの人間じゃねーか！殺されてーか！」

「それはちょっと・・・とりあえず、そこの二人ウチの生徒なんで連れて帰っていいですか？」

と、丁寧に交渉してみる。

「ふざけんな！そんなことするわけねぇだろ！」

自動人形が俺に襲い掛かる。っち！

「なら、文句ないよな？」

腕に力をイメージ、自動人形を殴り飛ばす。だがイメージが半端なためか、あまり効果がない。やはり『固定された』イメージが必要になる。固定されたイメージ。それは異世界にある本来の力。並行世界・・・俺が見て来た漫画やアニメの力があればいい。さっきイメージしたのがあった・・・これのイメージをさらに発展させてイメージをする。鷹の目を持つ頭。虎の爪をもつ腕。飛蝗の様な足。それらを一枚のメダルへ・・・そしてそれを制御する装置

「イメージ、オン！仮面ライダーＯＯＯ！」

オーズドライバーと3枚のメダルが装着される。そしてオースキャナーを手に取り、相手を蹴飛ばして距離を取る。そしてオースキャナーでスキャンした。特撮を見ていた時の通りの動作をおこなう。後はイメージが連動してそのまま行けるはずだ！

「変身！」

『タ・ト・バ・タトバ・タッ・トッ・バッ！』

仮面ライダーＯＯＯタトバコンボ。俺はトラクローを展開して自動人形を引き裂いた。

「オラッ！」

音を立てて崩れる自動人形たち。しかしながら自動人形もほぼ人の形をしている。相手は機械とはいえ・・・胸糞悪い！

「なっ・・・なっなっ・・・どうなって・・・」

一方の人狼は焦って俺を見る。人からこんな姿になれば驚きもするだろう。だが俺は自動人形を引き裂きながら今度は別のイメージを固定した。それはメダジャリバーだ。剣で切り裂き、前へと歩み寄る。だが人狼はすずかを盾にする。

「く、くるな！こいつがどうなってもいいのか！」

人の姿の辺りからして、恐らく月でも見ないと力が得られないんだろう。ご愁傷様。しかし困ったなぁ・・・メダジャリバーって確か

必殺技はヤミーしか切れないんだっけ。しかもすずかが盾か・・・参ったね、どうも

「武器捨てろ！」

「はいはい」

そういってメダジャリバーを放り投げる。メダジャリバーは俺の勢力下でなくなったことでイメージは消え去ってしまった。

「誇り高き人狼は人質取るのかよ」

「うっせぇ！」

良いながら手にしていたナイフを振り上げた。俺はとっさに腰にマウントされて残っていたセルメダルを弾くように飛ばした。仮面ライダーＯＯＯのパンチ力は１０．５ｔだ。指ではじく力も尋常じゃないだろう。ナイフを持つ腕に命中して男は痛がってナイフとすずかを落とした。

「きゃっ！？」

幸い上手く落ちたので怪我はないように見える。チャンスは今だけだ！

「これで終わりだ！」

『Ｔｒｉｐｌｅ！Ｓｃａｎｎｉｎｇ　ｃｈａｒｇｅ！』

足がバッタ脚状に変化したバッタレッグで跳び上がる。そしてリン

グが出来上がって行く。俺は人狼に向かってそのタトバキックをぶつけた。

「おりゃあああああああああああっ！」

「う、うわあああああああああ！」

逃げ場を失った人狼はタトバキックの餌食となり、そのまま爆発して消えた。正直あんまりいい気分ではない・・・っと、それよりすずかだ。俺は拘束を切り、目隠しをとってやった。

「大丈夫かい？」

「は、はい・・・」

少し動揺するすずか。まあ、俺の姿は今仮面ライダーＯＯＯだし・・・しょうがないか

「じゃあ、後は・・・」

俺はアリサの目隠しを取ると、拘束を切る。どうやらまだ眠っているらしい。これはすぐに退散したほうがよさそうだ。

「後は警察に連絡するといい。それじゃあね・・・」

「待ってください、あの、貴方はいったい？」

「俺？俺は・・・」

なんて名乗って去るのがいいかなと思ったが、その時だった。

――ドックン

「っぐ！」

俺はその場に崩れ落ちた。

「あの！どうしたんですか！？しっかりしてください！」

「ぐっ・・・うぅぅぅ！」

身体の中を激痛が走る。どうやらイメージする力の反動が大きすぎたらしい。本来仮面ライダーＯＯＯもその器でなければメダルの力には耐えられるものではない。すずかの声が遠のいていく。激痛は激しくなり、変身が解ける

「えっ・・・神谷、先生・・・！？」

「うっ・・・うあああああああああああああっ！」

身体の激痛は増し、俺は意識を失った。ここで意識を失えば・・・イメージの全てが解けて・・・しま・・・う・・・

俺の目の前は真っ暗になった

04：「Firstt fighht boy」（後書き）

というわけで、変身解けちゃいました。
次回は月村家が出てきます。ちなみに恭也は出てきません
戦闘にもなりません、多分

すずか誘拐フラグはカブトの無双でしたが、今回はＯＯＯでした。
ＯＯＯなら知ってる人はいるだろうということで。知らない人がいたらごめんなさい

とりあえずまた戦闘も他のアニメの物も出ないです

ちなみにアンケート
神谷迅のデバイス武器形状は何がいいですか？

ってことでアンケートもお願いします。前回はＺセイバーでしたが、なんか単純だなぁということで考えることにしました。面白いの、カッコいいの、ロマンがあるの、厨ニなもの、なんでも待ってます

ちなみに迅のイメージの凝固というのは単純に口で言う曖昧なイメージのことではなく、しっかりと何かしらの形で存在するものが強くあるもののこと
連動というのは個人が行動を起こすと起きる無意識のイメージ。これにより迅は仮面ライダーＯＯＯに変身できました。まあ、そのせいで力に耐えられなくなって変身が解けましたけどね

次回もお楽しみに

Next05「Boy, talk to a vampire」

05:「Boy, talk to a vampire」（前書き）

というわけで月村家です

個人的にすずかはかなり好きです。A' sまでしか出ないのがかなり残念orz

忍さんに限ってはA' sでも殆ど出ないという・・・

引き続き迅のデバイスを募集しています

ドシドシご応募ください

どんな武器か、だけで結構です。細かい詳細は不要ですので

では本編へどうぞ

05:「Boy, talk to a vampire」

Side迅

「・・・・・・知らない天井だ」

本当に知らないのでそんな一言。某決戦兵器のパイロット的な感じ。起き上がるとめちゃくちゃ広い部屋にいた。シャンデリアとか初めて見た・・・・・・・・・ん？しまったぁぁぁ！よく考えたらここって月村家かバニングス家じゃないか！？あの現状からしたらそうだろ！？そして現状８歳に戻ってる！完全に正体知られてるよ！やばいな・・・どうする？脱出するか・・・？身体は・・・動く、けどいててて！駄目だ、筋肉痛が・・・

「どうする・・・」

身体は恐らく無茶し過ぎたせいで動かない。あれからどんだけ時間が経った？すずかは多分救出されるだろう・・・しかし参ったな・・・時空管理局だけならともかく、夜の一族もこの世界で関わりがあるとなると・・・そうとう骨だぞ？それにしてもイメージを曖昧に５回。明確なイメージを１回やるとこのざまか。仮面ライダーＯＯＯは元々器である人間じゃないと身体が耐えきれないからな・・・本物じゃなかった所に唯一の救いか・・・

「解析開始（トレース・オン）」

相変わらず、これはイメージというよりもこっちの方が好きだ。身体を解析していく

身体

身体の全身に渡って重傷。筋肉痛によりあと2日は動けない

能力

イメージ能力５８％にまで低下。イメージによる身体の回復、能力の向上不可

・・・軽くやばくね？現段階で抵抗する術がない。根掘り葉掘り聞かれることになる可能性もある。どうするか・・・

ガチャ

「あ・・・起きたんですね」

扉が開き、いたのはすずかではなく姉の忍。姉の忍も何度か塾でその姿を見ている。後ろには自動人形否、ファリンがいる。完全に月村家だな・・・脱出は不可能か

「・・・・・・」

「あの、神谷先生・・・なんですよね？塾で何度かお会いしました。すずかから聞いたので・・・今のその姿が、本来の姿なのでしょうか？」

もう変身が解けるところも、イメージによって形成されていた変身魔法が解けた所もすずかに見られてしまっているだろう。それなら

ばもう隠す理由もないだろうしなぁ・・・あんまり知られたくない。特に外には

「・・・・・・・・・ああ」

頷く俺。少し驚く忍。まあ当然だろう

「話をするなら、二人で話をさせて欲しいのだが？」

と、俺がファリンを見る。少し困った様子になるファリンだが、忍が頷くと一礼して部屋から出て行ってしまった。どうやら何かあれば対処できる方法があるようだ。まあ、身体がほぼ動かず、起き上がることしかできない俺には今どうこうする力も忍をどうにかする力もないわけで・・・大人しく話を聞くしかない。第一、吸血鬼の忍を倒す術など怪我人の俺にはないだろう。

「あの、神谷先生は・・・」

「見たとおり、これが俺の本来の姿、年齢だ。９歳くらいか・・・まあ、色々あってあのような姿で生活している」

「その貴方の力はいったい・・・？」

力は一体何かと聞かれてもな・・・この世界のことを考えて言うなれば簡潔にまとめなければなるまい。

「俺の能力は見たとおり、異能な能力だ。別名で言うと稀少技能ともいうものだ」

「・・・・・・」

「それを知ってどうする？」

「どうもしません。先生はすずかを、そしてお友達のアリサちゃんを助けてくれましたし・・・感謝しています。ありがとうございます」

そう言って頭を下げる忍。だが、話はこれだけではないはずだ。話かたについては向こうが敬語を使っているということは塾の講師である俺として見ているのだろう。忍の目は子供を見るような目ではない。

「それで？」

「え？」

「まだ話があるんだろう？君たち自身のことだ」

「っ！気づいてらしたんですか？」

俺の言葉に驚く忍。まあ、夜の一族のことは秘匿されている。本来『夜の一族』は裏社会じゃ有名らしいからな・・・この世界だと

「ああ、まあな」

「私達は『夜の一族』と呼ばれる吸血鬼・・・化け物なんです」

「・・・・・・」

ま、知っていたけど言っている本人は言うのがつらそうだな。すず

かも吸血鬼・・・か

「すずかを誘拐したのは私達と同じように人ではない異形である『人狼』・・・夜の一族と敵対する種族の一つでもあるんです」

「なるほど、だからすずかは誘拐されたのか・・・」

「はい、それですずかの友達のアリサちゃんまで巻き込んでしまって・・・」

やれやれ、かなり気にしているようだな。まあ、俺は気にしていないが・・・

「それで、俺はそのことを知っているが・・・その俺はどうする？」

「お願いがあります。どうかこのことは他言無用でお願いしたいのです」

他言無用ねぇ・・・

「断ったら？」

「この場で口を塞ぎます」

「・・・・・・」

殺気が流れる。俺も同じように殺気で返す。だが現状では圧倒的に不利。体現しきれないイメージ・・・これは殺されるだけだ。別に漏らすつもりはないが・・・気になることはあるな。

「一ついいか？」

「なんですか？」

「月村忍、そしてキミの妹のすずか・・・どこが化け物だ？」

目の前にいるのは綺麗なお姉さんなんだが・・・

「え、でも・・・私達は吸血鬼で、化け物・・・」

「過去に人を襲った例があるのか？」

「い、いえ・・・血は・・・輸血パックから摂取しています」

・・・・・・お金持ちってすごいね、そんなこともできるんだ。というか、輸血パックかよっ！

「なら、貴方達の化け物という定義は少々間違っていると思う」

「え？」

「化け物とはすなわち、畏怖すべき存在を体現した架空の生物を指す。人の形をした、もしくは人が変化した奇形の動物、怪獣など。転じて、異端児、突出した存在の人を指して用いられることもあるわけだが・・・君たちは俺達人間が畏怖するべき行為を一度でもしたのか？」

「・・・・・・！」

ちなみに日本だと古神道という民間信仰で森羅万象に命が宿るとさ

れ、八百万の神とまたその荒ぶる姿として、妖怪やお化けや幽霊などがあり、その数は枚挙に暇がないほどらしい。その呼称も、お化け・化け・化け物・大化け・化生(けしょう)とも呼称し、霊魂の類と妖怪を意味する。この場合だと西洋の部類なのでまた違うのだろうが、殆ど一緒だ。ちなみに例を上げればその村だけで伝わる神様やその厄災なんかもある。ひぐらしのオヤシロサマとかな。

「それをしていない以上、君たちは人でないものの、別に化け物と定義するのはおかしくないだろうか？」

俺の言葉に驚きを隠せない様子の忍。そして・・・

「そろそろ出て来てくれる？すずかちゃん」

「え！？」

「・・・・・・」

扉の後ろで隠れていたすずかがそこにはいた。さっきから扉の隙間からチラチラ見えてたからな。俺は別に能力使ってないぞ。

「すずか・・・」

「神谷先生・・・私、化け物じゃないの？」

「俺はそう定義するのはおかしいと思っただけだけど？」

「私、アリサちゃんやなのはちゃんと、友達でいていいのかな？」

目に涙をためて言うすずか。今日のことがかなりショックだったら

しい。まあ、友達が巻き込まれればそう言う考えにも至るんだろう。それにしても化け物の定義を語るなんて俺も変な感じだな。俺も普通の人から外れてしまったからかな

「ま、話は逸れたけど別に外部に漏らす必要はないから」

「そう、ありがとう」

「さて、そろそろおいとま・・・いっ！」

そうだった・・・話をすることに夢中で身体が動かないの忘れてた・・・

「無理しちゃだめよ。お医者様の見立てだと数日は動けないほど身体が損傷していると聞いたわ。どうしてこんな風になるのかと首を傾げてはいたけれど・・・」

急に口調が変わる忍。どうやら今度は俺ののことを子供として見ているようだ。

「俺の力は、力の配分が大きければ大きいほど、本来の姿の身体に反動が帰ってくる。今回はショックがちょっと大きいだけ・・・」

「ならしばらくはこの家にいるといいわ。家には連絡を「いや、俺は一人暮らしだ」え？そうなの？」

「だから身体の肉体の見かけを変えて働いているんだ」

「そうなの・・・じゃあしばらく身体を休めて。すずか、出るわよ」

と、忍が促そうとするがすずかは動こうとしない。

「ねえお姉ちゃん、神谷先生の看病しててもいいかな？」

「・・・別にいいけれど」

おい、俺の意見は無視なのか？俺はまだ何も言ってないぞ？いや、別にいいけれども。そしてすずか、俺を子犬の様な目で見るな。お前は負傷している俺のＨＰ（平常心）を潰していく気か？原作キャラというのはどうしてこう、ライフを０にしたがる！？俺は再び寝る。忍は外へ出て行き、いるのはすずかと俺だけ。すずかの視線が凄くて俺は眠れん・・・

「あの、先生？」

「なんだ？」

「先生は・・・私が、怖くない？」

こいつは・・・話を聞いていたのか？いや聞いてないのか？あれだけドアとベッドまで距離があったからな。多分会話がちゃんと聞こえなかったと判断するのがいいな。

「ああ、怖くないよ」

「っ・・・！でも・・・」

「同じ質問を何度もしないで欲しいな。君は君だろう？月村すずか」

「う、うえええええん！」

泣きながら俺に抱きつくすずか。ぎゃあああああああああああああああっ！身体がぁ！

「――――――っ！」

声にならない痛みが俺を襲う。主にすずかが掴む右肩がぁ！あ、オワタ

「先生！？神谷先生――！？」

すずかが声を上げているが、ハッキリ言ってお前のせいだぞ、すずか・・・

俺はここで意識が途切れた。またか

Ｓｉｄｅ月村すずか

先生に嬉しくなって泣きながら抱きついた。私は化け物じゃないと、そう言ってくれた先生・・・先生って言うのもちょっとおかしいかな。確かに勉強を教えてくれてはいるけど、８歳の身体じゃなんかちょっと違うかな。私もまだ６歳だけど。先生っていうよりお兄ちゃんって感じ・・・でも、今はそんなことを言ってる場合じゃなかった

「ど、ど、ど・・・どうしよう・・・」

白目を剥いて気絶しているところを見ると、相当痛かったらしい。ど、どうしよう・・・お姉ちゃんを呼びたいけど。さっき私を引き剥がそうとしたらしき手が私を掴んで離さない。

「うーん・・・」

離そうとしても離れない。私の力でも離れない・・・凄い力・・・

「もういいや」

離すのを諦めて、白目をむいている目を閉じて私はベッドにもぐりこんだ。温かい・・・かつてこんなにも人の温もりを求めたことが私にはあっただろうか。いいやない。小さいころから・・・今も小さいけれど、幼稚園の時からいろんな人に狙われてきた。私が・・・人でないという理由で「夜の一族」という理由だけで・・・

「っ・・・！」

身体が熱くなる。求めてしまう。身体が『アレ』を・・・だめ！今ここで求めては・・・

「うっ・・・」

我慢する。身体が欲している。この人を・・・この人の中に流れているアレを・・・紅く滴るアレが欲しい・・・駄目、私は人を襲わない。だめ・・・お願い、止まって・・・！

「うぅ・・・っ！？すずか、どうした！」

目を先生が目を覚ました・・・！これなら

「せん、せい・・・離れて！」

「・・・・・・・・・なるほどな」

一言聞こえると、先生は私を抱き寄せた。そして・・・先生は思いがけない一言を発していた。

「俺の血を、好きなだけ吸え」

Ｓｉｄｅ迅

数分気絶していたらしいな。そして俺は目を覚ますとすずかの目が凄いことになってた。目が紅く光り、牙がむき出しになっている。どうやら血が欲しいようだ。手を離してやるが、離れてということを入れても身体が痛くてろくに動けない俺にそんな無茶要求されても困る。

「・・・・・・なるほどな」

イメージ開始・・・血は身体の中をめぐるものだ。イメージで多少増量しても大丈夫だろう。とりあえず死なない程度なら吸ってもらっても大丈夫なようにはする。後はすずかを鎮めればいいか。

「俺の血を、好きなだけ吸え」

俺はそう言ってすずかを抱き寄せる。

「――――っ！」

すずかは耐えられなくなったのか、俺の首筋に勢いよく噛みついた。血が吸われているのが良くわかる。この場で血を吸わせた理由。そ

れはすずか自身の身体を落ちつかせることもある。俺が無理に能力を使うことをして力ずくで抑えてもすずかはそれを破るだろう。ならば俺が媒体となって血を吸わせてしまえば一番落ち着くだろう。イメージしながら血を増やしていく。ゴクゴクとすずかが血を飲んでいるのが分かる。2分ほど血を吸うと、すずかの目は元の目に戻る。どうやら我に返ったらしい。すぐに俺から離れた。

「わ、私・・・」

「正気になったか？」

「先生・・・私・・・」

ボロボロと涙をこぼす。どうやら俺に襲い掛かってしまったことが自分でショックだったようだ。俺は優しくすずかの頭を撫でる。血を吸われた影響なのか、身体がフラフラするが身体の痛みがない。彼女の魔力の影響なのだろうか？

「大丈夫、俺は平気だ」

それを聞くとすずかはポスっと俺の胸の中に収まり、寝息を立てて寝てしまった。俺も横になって離そうとするが、離れない。どうしたもんかな、この状況。

「いてて・・・」

首をさすりながら血を止める。イメージ開始するか・・・

「解析（トレース・オン）開始」

身体

７０％が回復

魔力量３０％増大

イメージ率８７％まで回復

浸食中の因子２％

体調の全快まで2日から1日へと減少

・・・浸食中の因子ってなにさ？

さらに俺は解析を進めて行く。どうやらわずかに残った吸血鬼の力らしい。俺はそれイメージして外へ排出する。排出した魔力は紫色に光る。俺はそれを透明な瓶へ入れて封印した。どうやらこれが噂の吸血鬼に噛まれた人間が吸血鬼になる理由らしい。魔力の結合によって生まれるそれが身体の中で浸食し、増殖を繰り返していくもののようだ。とりあえず瓶をテーブルに置いて横になる。

「やれやれ」

すずかは相変わらず寝息を立てている。この世界はどうやら俺の知っている「魔法少女リリカルなのは」の世界とはまた違うらしいな・・・つまり、この先俺の知っている物語とは違うものが動いていくということだ。まさか・・・？

「この世界が俺にその本来の世界に修正するために俺が？」

もしそうなれば、俺は何かしらの形で世界に関わって行くことになるのか？でもそれは・・・

「この子達の運命を捻じ曲げろと？」

本来進むべき未来を捻じ曲げてまでこの世界は大筋の道のりを歩かせようとしているのか？そんなの、ひどすぎる・・・この世界はアニメの世界じゃない、また別の世界のはずだ。そんなことが許されるのか？否、許されることじゃない・・・なら、やることは一つだ

「この世界の意思で世界が変わるのなら、俺はそれを変えてやる・・・」

そんな一つの決意を胸に、俺は静かに眠ることにした。

・・・世界の運命が無情に判決を下すなら・・・俺は・・・

０５：「Ｂｏｙ，　ｔａｌｋ　ｔｏ　ａ　ｖａｍｐｉｒｅ」（後書き）

というわけで、原作介入を決意する迅でした。まあ、ブレイクするだけがこの話じゃないので、物語に沿うことは確実にしていくのでご安心ください

ちなみにこの世界ではすずかは魔力がＳランク以上の才能を持っています。アリサも同様です。アリサについてはまた別の機会に正体がばれることになります。

ではまた次回

Ｎｅｘｔ「Ｂｏｙ，　ｃｒｅａｔｅ」

０６：「Ｂｏｙ，　ｃｒｅａｔｅ」（前書き）

・・・・・・突然ですが、第一章はこれでおしまいです

次回からいよいよ、無印編の第二章がスタートします
というわけで、ちょっと今日なかなかお厳しいご意見をこの小説のレビューで頂いて少々凹んでおります

やはり、私の文才ではチート小説否、リメイクなどは無理な話だったのかｏｒｚ
個人的にこの小説がどっちつかずだったのには薄々と感じてはいたので反論のしようもなく、まさにその通り！（オイ
やはりもっと捻りがないとだめなのか？

もっともっと努力はして参ります。
それではどうぞっ！

06:「Boy, create」

月村家に正体がばれてから、数日が経った。すずかはあれから何度か俺の血を求めるようになる。それを知った忍は色々と難しい顔をしていた。だがすずか曰く、輸血パックなどよりも直で吸った方が高揚感が持てるとか持てないとか。今現在も血を吸われている俺。まあ血を吸われる度に俺はその傷口からその魔力を排出するという作業を行っている。それと変わったことがもう一つ

「お兄ちゃん、ごちそうさま」

すずかが俺のことをお兄ちゃんと呼ぶようになった。最初は神谷先生だったのだが、塾の講師を辞めてから「お兄ちゃん」と呼ばれるようになった。実際３つほど歳が上だから兄と呼ばれるのには問題はないものの、それによってなんというか・・・『お兄ちゃん』というワードがかなり心に響く。理性が吹っ飛びそうだ。それというのもお兄ちゃんワードが俺の心にストライクに響いているのだ。っと・・・

「よいしょ・・・」

魔力を引き抜き、封印。随分と溜まってしまった。この魔力って何かにできそうだな、いつか使いそうだから取っておこう。それにしてもこの前原作通りの話を通さないと考えていたが、実際に始まるのはまだまだ先の話。３年後。それまでにやることはあるだろうか？

「うーん・・・」

「お兄ちゃんどうしたの？もしかして痛かった？」

「いや、なんでもない。大丈夫だ」

と、ウルウルとした目で俺を見るすずか。やめろぉ！俺をそんなピュアな瞳で見るなぁ！俺の理性が本当に吹っ飛ぶから！

「さて、と・・・そろそろ帰るかな」

「えっ・・・帰るの？」

「ああ、またなすずか。今度は遊びに来いよ」

頭を撫でると気持ちよさそうにするすずか。うむ、なんか父親になった感じだ。それにしても俺がこの世界にきて１年が過ぎたけど、天界は何をしているのかな？

天界

Ｓｉｄｅ　レナ

はぁ～・・・疲れました。最近はどうも仕事が増えてる気がします。私は一応アテナ様の司書もやっているので資料を持って中へ。

「失礼します」

「レナ～・・・」

そこには資料の山に埋もれるアテナ様の姿がありました。

「もう、まただらけて・・・頑張ってください」

「この山を全て処理するのにどんだけ神力いると思ってるのよ・・・手伝って」

「私は自分の仕事で忙しいです」

と、言いながら自分の机に資料を置く・・・ん？なんか微妙に資料が増えてる・・・！

「アテナ様！またご自分の仕事を私に押しつけましたね！？」

「何のことかしら～♪」

と、口笛を吹きながらさっきとは打って変わって仕事を進めているアテナ様。私はその資料をすぐにそれを戻す。

「ご自分の仕事を天使の私に押し付けないでくださいっ！まったくもう！」

「いいじゃない、見なさいよこの資料と仕事の山」

見れば3山ほど、私の身長ほどの紙の山が出来てました。えーと、天界の今年度の予算計画案にシフトの要請。天使たちの仕事の内容。結構資料が大半ですね。アテナ様、お願いですから何でも認可しないでください。この「天界運動会」とか、どこの小学校ですかここは。何でもかんでも認可したらまた別の神様がうるさいんですから・・・そういえば

「そういえばアテナ様、あの転生した子はどうしたんですか？」

ふと、そんなことを思い出した。

「ああ、あの子？どうやら・・・自分の力で頑張ってるみたいよ、色々と」

「分かるんですね、どこの世界に行ったか分からないのに」

「ん～・・・まあ一応発信機的な物は付けたから問題はないわ。場所の特定も用意・・・でもねぇ」

「？」

「どうも、引っ掛かるのよ」

一体何がでしょうか？

「私が与えた覚えのない家に住んでるし・・・能力の向上も早いし・・・何故かしら」

「アテナ様が何かしたんじゃ？」

「そのつもりだったんだけど世界がそれを拒んだの。理由が何故かはわからない。原因を解明しているけど、今出来ることは、あの子を見守るだけよ・・・」

そう言いながらアテナ様は仕事を再開し始めました。なにか引っ掛かるアテナ様の言い方。そしてアテナ様の身に覚えのない彼への配慮。何が起きているのでしょうか・・・

地球

Ｓｉｄｅ　迅

家へ帰宅した後、俺はイメージを開始する。

「解析開始（トレース・オン）」

身体

１００％外部、内部共に異常なし

魔力の比率１４０％

ただし吸血鬼の魔力が混合

因子、完全消滅

総合結果　魔力を除き異常なし

よし、ここ数日で万全になったな。そろそろ自分専用のデバイスってのも作ってもいいころだろうか？デザインもイメージしないとな。今日は武器なんかを見るために図書館にでも行ってみるか？元々イメージでどんな武器でも作れるのだが、やはり固定された資料があるとそれを基盤に出来るのでとても良いものができる。どうせならインテリジェントデバイスにしよう。

「色々と考えるところもあるけど、まずは図書館だな」

ここからだと距離があるからなぁ・・・バイクで行くか？そう考えながら外へ出た。もちろん既に身体は偽装済み

「イメージ・オン」

身体は２０歳。バイクは俺の愛用の物。偽造の免許証もＯＫ。バイクに乗る。元々免許は持っていたからな・・・久しぶりのバイクだが問題はないだろう。

「よし、行くか」

バイクを走らせる。風が気持ちいい・・・ヘルメットを付けていても風を感じる。飛ばし過ぎると捕まるので自重はするものの、かなり早いスピードで走る。走り出して１５分ほどで目的の海鳴図書館へとやってきた。そういえばこの場所は確か八神はやてが来る場所だったけか？今はまだいないようだ・・・数年後にここに来て接触してみるのも悪くはないだろう。それはさて置き、本を探そう。

「これと、これと・・・後これだな」

適当に神話の本やらＳＦアニメの本などを読み漁った。色々と参考になる物もあれば、ならないものもいくつかあった。とりあえず参考になるもののコピーをとって、家へと戻ることにした。家に戻って早速デバイスを作ることにしよう。それにしても、はやてを見ることはなかったなぁ・・・

少年移動中

自宅

うむ、資料もあるし、個人的に身体の中のイメージも問題ない・・・・

「イメージ・オン」

イメージはまず簡単に基礎構造を組んでいく。まずは発動形態を考える。どうせなら原作にないような形の武器がいいな・・・双剣なんてどうだろうか？どうせなら形をちょっと凝って・・・機械っぽくするのもいいな。ガンダムのソードライフル的な感じ？そうすれば砲撃も発射できるこじつけになるし・・・うん、ガンダムのソードライフルっぽい感じでいいな。発動形態は。カートリッジシステムはまだいらないだろう。下手に時間枠崩して追及されたら面倒だし。時間が経つにつれて変化させていけばいいだろう。ということでイメージを確立。次は発動前の待機状態だな。アクセサリーは沢山あるなぁ・・・子供が付けてもあまりおかしくもないような物にしよう。となるとまずイヤリングは却下だな。個人的にアニメの中ではそれにしている人がいない気がしたからいいとも思ったけど・・・スタンダードにブレスレッドか、ネックレスか・・・・・指輪は大きさが変わっちゃうから駄目だな。よし、最初はブレスレッドにしてＡ，ｓ辺りからイヤリングにしよう。うん、これがいいな。ブレスレッドの形はシルバーに宝石が付いている感じ。ＡＩは女性型かな。男性型でもいいけど、なんとなく。声は・・・・・・誰にしよう。この世界の「中の人」の声と被るのはちょっとまずいか？誰がいいかなぁ・・・もういいや、適当ってことで。後はうん、性能的には普通より良いのにしよう。それと頑丈な感じで・・・うん、出来た！

「イメージ・アウト」

イメージを終了し、目の前に現れろと思う。すると目の前にはブレスレッドが置かれていた。

「いい感じだ。さて、起動してみようか・・・」

起動キーは・・・っと

「汝、我が名に答えよ、我が名は神谷迅。汝が使える主なり。起動せよ『アリス』！」

光が迸り、ブレスレッドは点滅を始める。起動キーはちょっと厨ニの方がカッコいいかなということでこんなになった。

『コード認証を確認。起動を確認。初めましてマイマスター、何なりとご命令を』

あるぇ？この声綾波ボイス・・・詰まる話、林原めぐみさんだ・・・ま、言いや。でもこう堅い感じだとまた違う雰囲気だな

「とりあえずよろしく、アリス・・・」

『はい、マスター』

「早速起動してみるか。アリス！セットアップだ！」

『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ　ｓｅｔ　ｕｐ　ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ　ｌａｄｙ』

バリアジャケットもイメージをする。その蒼いコートが身体に装着

され、ズボンも同様。そして両手には2本の剣が握られる。どうやら片方に宝石、つまりアリスが付くらしい。

『マスター・・・装備完了です』

「おし、いい感じだな」

身体が9歳でもこんな感じなんだな・・・悪くない。この後俺は色々な能力を確認、追加していった。

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

世界は廻る。その世界に訪れた一人の転生者と、その世界は、静かに世界の小さな思惑は、いつしか一つの欲望へと変わって行く

世界が望むのは世界の意思の確立

それに利用される一人の転生者と、その世界に生きる人々はその星の下で何を思い、何を願うのか？人々の願いと謎を残して、この世界は動く

さあ、世界が始まる

Ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ　ｔｈｅ　ｆｉｒｓｔ　ｃｈａｐｔｅｒ

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

06：「Boy, create」（後書き）

というわけで第一章完結！
そしてオリジナルデバイスはサラマンド先生のソードライフルを採用～！わーい！

詳細は以下の通り

アリス
インテリジェントデバイス
CV：林原めぐみ
待機状態　ブレスレッド
起動状態　ソードライフル×2

基本的に砲撃主体の射撃型デバイス。ぶっちゃけガンダムハルートのソードライフルまんま。カートリッジ機能は存在しないが、接近戦を行うことが可能

というわけでガンダムハルートのソードライフルのイメージがぴったしということで・・・当初私も双剣で考えていたのでそれプラスでサラマンド先生のご意見を採用しました

ただ、カラーリングはオレンジではなく蒼です。バリアジャケットなどの主体や魔力光も蒼なのでそれで統一しています。
この『アリス』というのはもちろん『不思議の国のアリス』のアリスから来ています。異世界へ訪れる（転生した）その主人公の相棒ということでアリスを採用しました。友人に感謝！

というわけで次からは第二章　無印編です

それでは！

Next Second chapter 「Magical girl」

01：「Magical girl」（前書き）

というわけでやってきました第二章！

迅が前作より弱い（汗

大丈夫、強くなる。というか前が強すぎるとこっちで弱いようにしたらギャップがひどいなぁ・・・orz

個人的にチート小説も主人公が普通の小説も好きです

この小説はどんな方向にむかってるのやら（汗

一応言っておきますが、この小説は「最強系列」のようで違うという中途半端です。現段階では

そのうち「最強系列」の主人公として活躍するのでご期待ください

01：「Magical girl」

Side迅

時は流れ、俺は13歳となる。なのはが10歳。つまり「魔法少女リリカルなのは」がスタートする。この間すずか、なのは、アリサは親友である。八神はやては一人暮らし。フェイト・テスタロッサは未遭遇のまま。つまり全てが原作通りに事が進んでいく。すずかは時が経つにつれて俺の血を欲するのを抑えるようになった。すずか曰く「お兄ちゃんに迷惑ばかりかけられない」とのこと。嬉しくもあり、ちょっと寂しい。なのはもなのはでちょくちょく遊びには来ていたが勉強が忙しくなったのか、少し経ってからばったりと来なくなった。未だにメールなどはしているが、ここしばらく会ってない。

「さてと・・・」

携帯を開くと着信が一つ。なのはからだ

「4月●日　19時20分
from　高町なのは
件名　拾ったの！

本文
怪我をしたフェレットさんを拾ったの、どうしたらいいと思う？お兄ちゃん』

フェレット・・・ユーノか。ということは発動は夜で・・・第一話か・・・

「長かったな・・・」

3年だもんな、長いよ

『マスター、ご指示を』

「うん？」

『ジュエルシードの回収に向かわないのですか？』

うーん・・・それも別に構わないんだけどさ。やっぱり第一話から介入するわけにもいかないよな。

「アリス、君のサーチではどれくらいの範囲でジュエルシードを見つけてる？」

『海鳴市内には4つほどでしょうか・・・12個中の他は海ですが、海のものは波などのせいで正しいデータが取れません』

「そっか」

なら、第一話、第二話のジュエルシードはなのはが当然確保するはずだ。そのうちに他のジュエルシードをいくつか回収してしまえばいいんじゃないか？うん、それがいい。そうすれば原作の介入は別の形で入ることになる。

「アリス、早速明日から動こう」

『今日はよろしいのですか？』

「・・・身体痛いもの」

周りには内職で作った商品の山が転がっていた。バイトは色々としている。最近始めた内職は年齢を偽って働くこともできるので変身(イメージ)魔法を使わなくても仕事ができるので負担が減る。イメージを使う消費率も随分と下がり、身体で定着している。でも体力は力を使わないと普通の１３歳の体力なので、しんどい

『かしこまりました』

「じゃ、風呂行ってくるね」

『はい、ごゆるりと』

アリスは相変わらずとても俺に順応だ。デバイスってそんなもんなのかな？ＳｔｒｉｋｅｒＳとかだとスバルのマッハキャリバーとの関係は主従というよりも親友だもんなぁ・・・それもカッコいい気がする。風呂に入り、羽根を伸ばす。気持ちがいい・・・それにしても今更だけど本当にこの話に介入していいんだよな・・・俺は、世界の思惑には乗せられない。だけどこの今考えてることこそ世界の思惑だとしたら？考えればきりがない・・・

「はぁ・・・」

ま、考えても仕方がない。この力で乗り切れるものは乗り切って行く。それが今の俺の最善なんだろう。考えるのはともかく明日だな

翌日

朝目を覚ますと、メールが届いていた。

『お兄ちゃんに相談があるから公園に来て』

相談？もしかしてジュエルシードのことだろうか？行ってみればわかることだが・・・なのははどうして家族じゃなくて俺に相談するかな。前にちょっとの喧嘩の時も俺に相談してきたし、親と喧嘩するとウチに家出に来るし・・・とりあえず着替えるか

「行くぜアリス」

『オーライマイマスター』

ここ数年で手に入れたボードを手に、外へと駆けだす。フリーラインスケートと呼ばれるもので、２つの２輪の着いた板２つで乗るというなかなか面白いものだ。身体が小さいのでバランスを取りやすい。大人でも結構やる人が多い。日本だとそこまで有名じゃないだろうか？知らない人は調べて見ると良い

「よっと・・・」

フリーラインスケートで走り、道を行く。とても気持ちがいいのだ。最初はローラーブレイド、次にスケートボードで、最近はこれだ。色々な乗り物で遊ぶ楽しさがこの年代の子供だとよくできるので楽しい。学校にも行ってないからな。ちなみに本来なら公道で走るのは禁止されているが、この世界ではまだフリーラインスケートが誕生すらしていないのでそんな法律もない。数分すると公園へと到着する。なのはと初めて出会った公園。俺がこの世界に来て初めて立っていた場所。ベンチにはなのはが座っていた。

「なのは～」

「あ！お兄ちゃん！」

笑顔で俺に手を振るなのは。傍らにはフェレットがチョコンと立っている。包帯をしているところを見るとまだ怪我をしている様子だ。

「よっと」

スケートを降りて、スケートを手に取る。

「久しぶりだななのは。元気か？」

「うん！お兄ちゃんまた違う乗り物に乗ってるの！」

「おう、フリーラインスケートだ。やってみるか？」

俺が聞くと全力で横に首を振られる。スポーツが苦手ななのははどうもこの手のスポーツが苦手だ。というか、原作でも大体のスポーツは苦手だったな。

「ははは・・・で？なんだよ、相談って」

「その、あのね・・・？お兄ちゃんは魔法って信じる？」

直球のなのはの質問。まあ、大方予想通り、ジュエルシードについてなのだろう。なので

「おう、信じるぞ」

直球をそのまま打ち返してやった。

「そうだよね、信じない・・・って、ほぇ！？」

ほぇって・・・お前、が封印してんのはカードじゃなくて宝石だろうが

「ん？なんか俺おかしいこと言ったか？」

「だ、だって、魔法だよ！？」

「なのはが俺に嘘ついたり変な冗談俺に言ったりしたことないだろ？」

俺が言うと、なのはは嬉しそうに頷いた。普通なら理解されないそれを俺が理解して頷けば当然かもしれない。そしてなのははポツリポツリと昨日の出来事について語りだした。そしてユーノの紹介

「えっとね、こっちがそのユーノ君なの」

「初めまして」

「・・・フェレットが喋った。すげぇな」

と、驚く俺。俺は多分俳優になれるんじゃないか？そしてユーノ自身も、自分の責任でジュエルシードを集めると言いだす。そして口論になり、俺に相談してきたというわけだ。

「ふむ・・・」

「神谷さんもなのはにどうにか言ってください！」

「悪いが、なのははこう言いだしたらテコでも動かん。それにその怪我でジュエルシードとやらをどうやって集める気だ、お前は」

「そ、それは・・・」

まあ、ユーノの怪我の状態を見ればまともに魔法を使えることもないし、何よりも目の前の現状を見捨てるような俺でもない。何より原作の介入は俺の行為の一つでもある。

「なのはは言い出したら聞かないし、事情を聞けば俺も君を放って置くことなんか当然できない」

「うっ・・・」

責任を持とうとするのは良いが、一人でやるのはちょっと難しいと思うぞ

「勇気と無謀は違うぞ？一人で何でも背負うことはないさ。そもそも一族の発掘でいくら君のミスでもそれを君だけに回収させに行くのもおかしいところさ」

こうしてしばらく話してから、結局俺となのははユーノと協力することになった。

「ジュエルシードを発見したらなのはに知らせて、神谷さんはその場から離れてください」

「え？なんで？」

「だって危ないですよ、魔力を使わない一般人の人が古代遺失物を扱うなんて」

まあ、そりゃそうだ。

「じゃあ、俺が一般人じゃなきゃいいんだろ？」

「「は？」」

意味が分からないという顔をする二人。フェレットでその表情を作れるとは・・・やるなユーノ！

「これ、なーんだ」

『初めまして』

「デバイス！？」

驚いている二人。まあ、そりゃ当然だよな。

「これで俺も一般人じゃないだろ？」

「で、でもどうして貴方が！？しかもレイジングハートと同じインテリジェントデバイスじゃないですか！」

「ウチは実は魔法系列の家系でな、こいつ・・・まあアリスというんだが、両親から引き継がれている。詳しいことは他の人には内緒なんだが、こうなった以上はこいつを使うことになるだろ？」

と、適当に嘘をついてみる。するとアリスが点滅する。

『非才な身なれど、全力で協力いたします。なのは様、ユーノ様』

こうして相談終了。俺はどうやらなのは側に着くということになりそうだ。でもそうなるとなぁ・・・フェイトにどうやってフォロー入れてやるかだ。難しいな・・・

「とりあえず、一緒に頑張ろうか、なのは、ユーノ」

「うん！」

「はい！」

というわけでこれで俺はなのは側。フェイト側へのフォローを考えないとな。後は・・・

「なのは、親にこの話したのか？」

「ううん、してないよ？」

さも当然のように言うなドアホ

「危険なことだろ？古代遺失物を集めるのなんてさ。親には説明しないと」

「でも、信じてくれないよ」

そりゃそうだろ・・・てか、原作だとA，S最終回までそれを知る

ことはない。確か本格的になのはが管理局に入るという話をＡ，ｓの最終回のエンディングでやっているのを見ただけだ。事件を早期に解決して早めにユーノに里に帰ってもらうに限る。管理局との接触さえ避ければＡ，ｓ編でも面倒な手間が省けるはずだ。

「わかった・・・じゃあ約束だ。ことが終わった後、きっちり話を家族につける。怒られるのは一緒にしてあげるから。いいな？」

「うん」

さて、俺もそろそろ本格的に動くとするか。

海鳴市　海鳴神社

反応を追って来ると、神社でジュエルシードを取り込んだ獣らしきものが襲いかかってきた。なのはが急いでバリアジャケットとレイジングハートをイメージしてセットアップしていた。さてと

「アリス」

『いつでもどうぞ？』

「セットアップ」

『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ　Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ　ｓｅｔ　ｕｐ　ｓｔａｎｄｂｙ　ｌａｄｙ』

なのはに襲い掛かる獣を俺はソードライフルで防ぐ。１３歳の身体でもこれは厳しいぞ！

「なのは、大丈夫か！？」

「うん！」

「さがってろ、封印は任せるからな！」

ソードライフル、すなわちアリスを構えなおし、敵へと斬りかかる。

「っち！」

反応が思ったよりも早い。攻撃速度を上げないと・・・

「だったらぁ！」

ソードライフルからビームを発射する俺。当たらないがその敵の動きの誘導をすることくらいはできる。

「そこだっ！」

――閃っ！！！

一太刀が入る。獣はそれを受けて吹き飛ぶが、まだしぶとく襲いかかろうとする。なかなかタフだな。これを見るとやはりなのはのディバインバスターはそれをも黙らせる威力があるということなのだろう。

「やっぱり完璧な状態じゃないと無理か・・・」

技術提供者がいればいいんだけどなぁ・・・。イメージだけだとインテリジェントデバイスは複雑だから難しい。管理局には関わりた

くないし、やっぱり『あの人』しかいないんだろう。まあ今の現状で我がままなんて言ってられないしと・・・

「次で決めるか、なのは・・・封印準備」

「う、うん・・・えと、ユーノ君・・・」

封印方法を聞くなのは。とりあえず時間稼ぎをして、剣撃で敵を叩きつけた。

「なのは！」

「うん！いくよ、リリカル、マジカル！ジュエルシード封印！」

でた、リリカル、マジカル・・・・・・これ、Ｓｔｒｉｋｅｒｓだと聞いたことないんだけど。大人になってもやってるのかな？

「ふぅー・・・」

『マスター、大丈夫ですか？』

久しぶりに身体使ったから身体のふしぶしが痛い。なのはもなんとか封印をしているようだ。やれやれ・・・この先が思いやられるねぇ

高町なのは　ジュエルシード　３つ

０１：「Ｍａｇｉｃａｌ　ｇｉｒｌ」（後書き）

というわけで無印スタートです

とりあえずユーノと仲がいい？迅。前作では三枚に下ろそうとしたり、女風呂に突っ込んだりと酷いことをしてましたが何といいやつに（笑）

あとはどうしようかなぁ・・・男性キャラが優遇されないこの物語・・・可哀想な男性キャラ

そして現在の状況ですが、身体の負荷をかけないため迅の身体にはリミッターが掛っています。大きすぎる力は身の破滅です

話を増すごとに力の解放は多くなっていきます。それにしても・・・

リリカルマジカル・・・ｆｏｒｃｅでもやるのだろうか？２６歳のなのはさんは（汗

Ｎｅｘｔ『Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｍａｇｉｃａｌ　ｇｉｒｌ』

02：「Another Magical girl」（前書き）

退院後久しぶりの更新です。まだ本調子ではありませんが、頑張りますので、応援よろしくお願いします。

この作品については私の活動報告について読んでいただけると幸いです

02：「Another Magical girl」

時が経つのは早いもので。なのはは現在数個のジュエルシードを会得している。現在5個。なぜか俺に連絡をしてくれないなのは。何故かと聞くと発動してから余裕がなかったという。プールで1つ。夜の学校で1つ・・・待てよ？6個目って確かサッカーの試合の日の発動じゃなかったか・・・！？俺は急いで携帯でなのはに電話をかけた。しかし出ない

「くそっ！」

ここではたしかジュエルシードの被害が甚大だったはず。これ以上なのはに負担はかけられないし、ここで止めに行くのも一緒に集めている側としての筋だろう。俺は空を飛んでサッカーの試合が行われるであろう場所へと向かった

海鳴市上空

空を飛んでいると、途中で何かが襲いかかってきた。

「――――！」

「なっ・・・！」

よくわからない、翼の生えた得体のしれない生物だった。形だけならそれは鳥に見える。だが明らかに大きさが2mを超えた化け物だ。身体は何かに包まれているが、所々身体の部分がグロい。さながら怪鳥と言うべきなのだが、モンハンなどのクック先生の様な可愛ら

しさもなければ、形が整っているわけでもない。そしてその生物はジュエルシードの反動を受けたわけでもない。力の影響を感じない。ただそこにいる生物なのだ。生物は悲鳴を上げて光線を放ってきた。

「っ・・・！明らかに『この世界の』生物じゃない！？」

なんでこんなものが！？イレギュラー！？イレギュラーなんて話じゃない！こんな生物存在するわけがないのに・・・この世界でも、俺の世界でも！

「アリス！」

『バトルモード起動、ツインソード』

双剣を手に、その怪鳥の特攻を止める。だがその突進力もかなり高い。

「っく・・・！」

イメージする・・・アリスの一撃は何もかもを引き裂く・・・！敵を、大気を、塵を、空気さえも・・・！

「だあああああああああああっ！」

アリスに魔力が宿り、怪物への特攻へ一閃を放つ。これで終わりだ・・・！そう、そう思っていた。

――ガキィン！

「――――――！」

「ば、バカな・・・！」

イメージしていたのは全てを両断する一撃のはずだ・・・なのになぜ・・・

「――――！」

「斬れてない！？」

怪鳥は奇声を上げる。剣はその片翼の翼に当たってはいたが、刃が食い込んでもいない。そしてさらに言うなれば、これは一つの答えがある。

『マスター！』

「っ！」

光線をアリスが紙一重で防御陣を張ってガードするが、吹っ飛ばされる。時間がないって言うのに・・・！

「確かにイメージしたのになぜ・・・！」

「――――――！」

突進を避ける。だが肩を翼がかすめ、血が出る・・・かすっただけでこれか。速い・・・さっきよりも格段的にスピードが上がっている。アリスはまだ不完全だ。イメージの固定があってこそその姿を保ち、力を発揮している。なのになぜだ。アリスは正常に稼働している。解析でも異常はない。なのになぜこれ以上のイメージができ

ない！？

『マスター前を！』

何か巨大な一撃を放とうとしているのか、空中の俺より高い場所からエネルギーを溜めている。そして直感した。

――アレはまずい！

「アリス！砲撃をする！」

『オーライ、マイマスター！』

双剣が銃へと変わる。ガンダムハルートのソードライフルとほぼ同じものではあるのだが、俺のイメージによってガンモードでは連結して収束砲を撃つことができるのだ。なのはの砲撃には劣るものの、敵を倒すのはこれしかない。

『発射準備完了』

「行くぞ、スターダスト、バスター！」

『ｓｔａｒｄｕｓｔ　ｂａｓｔｅｒ』

星屑の砲撃。輝く粒子と共に、砲撃が敵へと向かって行く。敵も同じように砲撃を放ってくる。

「ぐっ・・・うぅ・・・！」

押される。イメージする。この一撃は輝く光と共に行く最強の一撃

だと。変わることのない、敵をただ殲滅するための光。負けるか・・・こんなところで・・・

「アイツが、なのはが戦ってんだ・・・！」

徐々に押し始めるスターダストバスター・・・っく！なんでイメージできない！イメージが具現化されない！？

「くそったれがぁぁぁぁぁ！」

最早イメージなど不要。全ての魔力をありったけアリスへと注いだ。スターダストバスターは輝きを増し、怪鳥へとぶつかった。

「――――――！」

星屑の光に包まれて、怪鳥は消滅した。アリスには非殺傷設定がない。だがイメージによってそれをすることはできるはずだった。だがイメージは発動せず消え去った。

「はあっ、はあっ、はあっ・・・！」

魔力を放出しすぎたせいで身体に半端のない疲労感が襲う。なんだったんだ今のは・・・！

『マスター！急がないと・・・！』

そうだった・・・なのは！俺はさらにスピードを加速しその海鳴のサッカーグラウンドの方へと向かって行った。

少年移動中…

場所に着くと、全てが遅すぎた。すでにジュエルシードは暴走しており、後の祭り・・・夕焼けに染まる海鳴の下で、なのはを見つけた。

「なのは！ユーノ！」

「おにい、ちゃん・・・」

ボロボロであり、そして手にはジュエルシードが握りしめられていた。

「大丈夫か？遅れて済まない・・・」

この後、事情をユーノから聞いた。サッカーの試合の前、なのははジュエルシードを男の子が持っていると分かっていた。だが断言ができずそのままになってしまった。つまり、原作通り・・・なのはは2人の人間に怪我をさせてしまった。そしてそれを放置したがために、ジュエルシードは発動し暴走。現在の結果となったのだ。なのはは項垂れている。原作を知っているにも関わらずその騒動に間に合わなかった。事前に連絡を取って近くにさえいれば、こんなことにはならなかっただろう。原作知識を持っていても、その場にいなければ対処できない・・・自分自身の無力さを感じ取った。

「なのは・・・怪我はないんだな？」

「う、うん・・・でも、あの人達が・・・」

「お前のせいじゃない、もう失敗しないように、俺もこれからフォローする・・・な？」

「うん・・・」

俺の言葉に少しだけ反応を見せてもうなだれるなのは。やはり自分自身のダメージは大きかったようだ。この後なのははトボトボと帰って行った。俺はなのはを励ますことも出来ぬまま・・・この話を終えてしまった。

「あの時・・・」

残された俺は静かに歩き始め、思考する。イメージは今完全に動くようになっていた。イメージすれば地面を素手で割れる。何もない所から炎を出せる。イメージは完全に出来ている。なのになぜ、あの時・・・

『何故、斬れない！？』

俺がイメージした一撃は何をも切り裂く、斬鉄剣さえも超えた一撃だったはずだ。地上の空気さえも切り裂くそのイメージが具現化されなかった。そしてあの怪鳥の様な生物・・・アレは明らかに地球上に存在する生物でも、この世界を繋ぐことができるミッドチルダの生物でもなかった。

「アリス」

『はい、何でしょうか？』

「お前は俺のイメージによって形態が変わったりすることの理由を知ってるな？」

『はい』

アリスは元々俺が作り出したイメージの結晶体だ。そこに本当に生まれて来たわけじゃない。彼女の本物を作るには別の人の協力がいるのだ。それまでしばらく、イメージを保ち続けなければないのだが・・・イメージが途切れることが怖い。戦闘中にイメージが不安定になることは俺がただの一般人になることを意味している。その時ジュエルシードの発動に直面したら？もちろんただでは済まないだろう・・・

「ともかく考えることが多すぎるな・・・対策を練らないと」

こうして俺は帰宅するのだった。この後に直面することも知らずに

それからまた幾日の時が流れた。ある日月村家から電話が来た。お茶会をするのでこないか？と。これはフェイト登場フラグだ。なぜ俺が関わるのか不明ではあるものの・・・その場所でなのはの加勢に加わることができる利点がある。

「フェイト、か・・・」

フェイト・テスタロッサ・・・この物語では2人目の魔法少女。彼女自身の先の人生はなのはと共の壮大な道を歩き続けることとなる。それが彼女の人生だ。

「問題はＰＴ事件だな・・・」

犯罪者となるプレシア・テスタロッサ・・・そして死したまま消えて行くキャラのアリシア・テスタロッサ。そしてそれに関わるリンディ・ハラオウン率いる「時空管理局」

「・・・・・・」

考えていても仕方がない。この世界にいる以上俺は「この世界」の人間だ。未来を知って生きているだけの人間。ならばこの世界の戦いで誰も悲しまない方向に進めばいい。そうすれば・・・この世界は全く違う方向へと進んでいく。その時世界は、そして俺はどうなるのか？俺は俺自身の答えを見つけるために、俺は戦わなければいけない。たとえそのために、なのはを犠牲にすることになっても・・・

翌日

『マスター、朝です』

「ああ、おはようアリス」

朝８時。普通ならば学校の時間ではあるが、学校に行ってない俺は遅い起床である。朝食を作り、洗濯して掃除して・・・前世で一人暮らししてたから抵抗はないものの、１３歳でこれは正直悲しくなってくる。そんな感じで一日を過ごす。今日は確かすずかがお茶会をするとかしないとか言ってたな。月村家まで何で行こう・・・

「ま、飛ぶか」

完全に魔法の無駄遣いだが、良いだろ、減るもんじゃないし。2時頃になってから家を出て適当にお菓子を見作ろうと、誰もいない場所で飛翔する。月村家は街から少し離れた場所になるので着地も人目につくことはない。

――ピンポーン

『はい』

「どうも、神谷です」

『少々お待ちください』

ファリンの声が聞こえ、でかい門が開いた。中に入ればどこを見ても猫猫猫・・・猫だらけ。すずかの話では里親などがいない猫やら野良猫やらがいるらしい。吸血鬼は猫が好きな体質にでもなっているのか？中を歩いていると、遠くから声が聞こえた。

「お兄ちゃーん！」

「あ、すずかぁ！？」

すずかが全力疾走で俺に飛び込んできた。その吸血鬼の魔力を込めた脚力で突っ込んでくればその突進力も半端ではない。

「すず、か・・・ロケットずつきは1ターンま、て・・・」

「・・・？お兄ちゃんなんて言ったの？」

「い、いいや、なんでもない。久しぶりすずか、元気だったか？」

「うん！」

笑顔満点のすずかは非常に可愛い。久しぶりに会えるのが嬉しいというのが伝わってくる。普段一人の俺としてはこれが嬉しいことこの上ない。

「さ、お茶の準備も出来ているから行こう？」

手を繋ぎ、中庭を歩く俺とすずか。ここ最近彼女自身が安定してきているためか、俺の血を望むことはない。つまり彼女自身が成長した証なのだと忍さんは言う。中にはには誰もいない。どうやらまだアリサとなのはは来ていないようだ。

「ああそうだ、これは俺のお土産だ」

と、適当に買った菓子をすずかに渡した。内容は和菓子。明らかにことは不釣り合いだな。失敗だったか。

「わあ！私コレ大好き！ファリン！緑茶を用意して！」

「かしこまりました」

すずか的にはストライクだったらしい。ファリンさんが屋敷の中へと戻って行く。

「そういえばお兄ちゃん。最近街の中で嫌な空気を感じるの。何か知ってる？」

嫌な空気？ジュエルシードのことか？

「最近、街のあちこちが壊れているって話も聞くし・・・」

「そうだな、知ってはいるけどすずかが首を突っ込むことじゃない」

「でも・・・」

大方、自分のことで気になることがあるんだろう。

「大丈夫、このことは夜の一族が関わる必要はない話だし」

「でも、お兄ちゃんは関わっている」

うっ・・・鋭い。まあ事情を「知っている＝関わっている」という方式は間違いではない。すずかは納得をしないだろうが、この事件ではすずかは無理に事件に関わる必要性がないからな。

「大丈夫だよすずか、すずかが心配することなんて何一つない」

「でも・・・「お嬢様、アリサさんがいらっしゃいました」・・・うん、お通しして」

これっきりこの会話はなしにする。どうやらファリンはタイミングを見計らってくれたようだ。

「ありがと、ファリンさん」

俺が小声で言うと、ファリンが頷いていた。

「いえ、お嬢様を危険にさらすわけにも行きませんから」

そしてアリサが入ってくる。そういえばアリサと俺はこの姿だと初対面だな。

「いらっしゃい、アリサちゃん」

「ええ、すずか・・・そこの人、誰？」

「うん、この人が私の紹介したいって言っていた人だよ。お兄ちゃん、こちらはアリサちゃん。私の友達なの」

と、アリサを紹介するすずか。

「初めまして、神谷迅だ」

「アリサ・バニングスよ・・・・・・あなた、どっかで会ったことない？」

と、首を傾げるアリサ。そういえばＡ，ｓでは子犬のアルフのことにも疑問を持っていたくらいだ。相当彼女は勘がいいのだろう。すずかも若干の焦りを見せていた。

「いや、初対面だ。よろしくね」

「ええ、よろしく。そういえばなのはは？」

「まだみたい」

まあ、そのうち来るだろ。この日は確かフェイトが出てくる日だ・・

・この介入に何かしらの邪魔がないといいがな

この後なのはが到着してお茶会が始まる。なのはがすずかが紹介したいと言っていた友達が俺だったことに驚いていた。すずかもなのはと俺が知り合いであることに驚いていた。そしてジュエルシードが発動する。

「（なのは！迅さん！）」

「（・・・ジュエルシードか）」

「（僕がなんとかします！）」

と、脱走を見せかけるユーノ。そしてそれを追いかけるなのは。よし、俺も行くか

「二人ともちょっと待っててくれ」

こうして駆け出す俺・・・この後の介入どうするべきか

1　ジュエルシードを俺が取る

2　傍観

3　なのはの助けのみに徹する

・・・1、だな

俺はなのはに追いついて現状を見た。でかい猫がおる。ウルトラマンにでも駆逐してもらった方がいいくらいでかい猫だ。ユーノ曰く、その猫のでかくなりたいという理由らしいが・・・

「でかすぎじゃね？」

原作よりも幾分でかい気がした。本当にでかい・・・

「ねえユーノ君、お兄ちゃんどうしよう・・・」

「そうだな、まあある程度ダメージは与えないと駄目だろ。で、封印するか。今は結界があるとはいえ破られたら大騒ぎだしな」

そう言ってデバイスを構える俺達。だがそこで・・・

「バルディッシュ・・・」

声が聞こえた。

「なのはっ！」

なのはを抱えてジャンプ。金色の魔力弾が撃ち込まれる。それを避けて空中を見た。そこにいたのは金髪のツインテールの少女だった。

「え！？あれって・・・」

なのはが驚きの声を上げる。

「申し訳ないけど・・・頂いて行きます」

そう一言言うと、フェイトはハーケンセイバーで猫を倒し、ジュエルシードを手に入れようとする。現状を理解できないなのはでは戦えない。俺は空中と飛び、排出されたジュエルシードを掴み取った

「っと・・・こいつは渡せないな」

「・・・それを、渡してください」

デバイスを突きつけるフェイト。この物語では現状最強はフェイトのはずだ。勝てるかは分からないが・・・・・・

「悪いけど、譲れないね」

アリスを構える。

「なら、奪い取ります・・・」

フェイトが空中から駆け出し、バルディッシュを構えた。俺もアリスを構える。

「いくぞ！」

二つのデバイスが激突した。まさにその瞬間だった

――カチ――

どこかで、そんな音がした。

02：「Another Magical girl」（後書き）

今回登場した新しい技の紹介です

スターダストバスター（stardust baster）
なのはのディバインバスターと同系統の砲撃。攻撃力は今のところアリスが未完成なのでA＋級の砲撃であるが、本来ならばAAクラスの砲撃となっている。

Next「Angel boy」

03：「Angil and boy」（前書き）

今日は何故かネタが浮かんだので2連続投稿。やはり最近まで小説を書いてないからのって書けない。頑張ろう・・・

03：「Angil and boy」

――ガキィィン！

俺のアリスとフェイトのバルディッシュがぶつかり合う。威力も速さもなのはより断然上だ。元々バトルスタイルが違うとはいえ、今なのはが戦ったら間違いなくコテンパンにされる。原作を見ててよくわかってはいるが・・・現状では俺も結構やばい。なぜなら戦闘経験の差は圧倒的に向こうが上だからだ。俺の戦闘経験の量など、なのはよりもちょっと上位だ。

「っと・・・！」

攻撃を避けて距離を取る。するとフェイトがバルディッシュを構えなおした。

「プラズマランサーセット！」

『ｆｉｒｅ』

プラズマランサーが飛ぶ。くそがっ！

「アリス！属性変化！」

『了解、モデル『アイス』ダウンロード！』

アリスのダウンロードによって俺の白かったバリアジャケットは蒼く染まっていく。

「！？」

「はあっ！」

飛んできたそれぞれの魔力弾を切り裂く。そしてアリスの刃は恐ろしいほどの冷気が噴き出していた。

「コレ、女の子にぶつけたくないんだけど」

『そんなこと言っている場合ですか。それに・・・他の奴の方がもっとエグイんですから』

「それもそうだな・・・行くぞ！」

駆けだし、アリスを振るう。

「っ・・・！？」

「うおらっ！」

アリスを受けたバルディッシュが凍ったのに驚くフェイトだったが、もう一本のアリスの剣で振り抜くと間一髪でフェイトがそれを避ける。

「そ、それは・・・」

「これは『氷結』の魔力変換さ・・・そろそろ決めるぜ？」

『パワーチャージ』

「行くぜ、瞬間（フリージング・・・）」

――ドックン！

技を放とうとした瞬間、頭に激痛が走る。な、なんだ・・・！

「ぐっ・・・うぅ・・・！」

「！？」

な、なんだ・・・！急に・・・

「ぐあああああああああああああああああああああっ！」

身体が燃えるように熱くなる。これは・・・いったい・・・！

「はあっ！はあっ！」

その熱さはすぐに収まった。フェイトはそれを唖然として見ている。まだ、逃げていない。俺の持っているジュエルシードを取ろうとする算段か。これ以上の戦闘は出来ない・・・！

「うおらああっ！」

「っ！？」

そこへ拳が飛んでくる。瞬間的にアリスが防御魔法陣を展開することでそれを防ぐが、衝撃で吹き飛ばされる。まずいな・・・忘れてた。フェイトには使い魔がいたんだったな。

「大丈夫かい？フェイト」

「アルフ・・・」

「なんだいあの坊や？さあ、さっさとジュエルシードを渡しな！」

っち！これ以上の戦闘は・・・無理にでもするしかないか

「アリス、いけるか？」

『私は問題ありませんが・・・マスターは？』

「なんとかするさ」

再びアリスを構える俺。アルフも戦闘態勢を取った。フェイトは先ほどの俺の行動が気になるらしいが、ジュエルシードを手に入れたいという意思は変わっていない。

「上等だ！行くよ！」

「っく！」

突き出してくる拳を避け、アリスを振るう。だが身体が先ほどからだるいせいか、思ったように動くことが出来ない。だが・・・！

「これでどうだ！」

「なっ！？」

アリスの発射口から冷気が噴出する。それによって目くらましにし

てアルフの腹を蹴り飛ばした。

「がっ・・・」

「はあっ、はあっ・・・」

「やるねぇ坊や・・・まだまだ行くよ！」

そういって再び構えなおす

「いや、もう終わりだよ・・・」

俺の言葉にアルフは首を傾げる。だがその眼はすぐ驚愕なものに代わっていた。自分の腕が凍りついているのだ。

「今のは一吹雪の吐息（Ｂｌｉｚｚａｒｄ　ｂｒａｃｅ）・・・瞬間的にアレを喰らうとどこかしらが凍るのさ」

「っ！こんなもの・・・」

「やめといた方がいい・・・その腕、早く溶かさないと凍傷になっちゃうよ？」

「ぐっ・・・」

でも、このままじゃ可哀想だよな。

「どうする？そこのキミ。降参してくれるんだったらそこの人の氷すぐ溶かすけど？」

「アンタ何を「・・・・・わかりました」フェイト！？」

「ジュエルシードも大事だけど、アルフのほうが大事だから」

フェイトの言葉にアルフはやれやれとため息をついた。ゆっくりと地上に降りて、アリスに呼び掛ける。ちなみに降りた場所はなのはたちから離れた場所だ。改めて思うけとどんだけ広いんだよ月村家。

「アリス」

『モデル『ファイア』ダウンロード』

今度は俺のバリアジャケットとアリスが紅くなる。アリスをアルフに向けて、炎を出した。

「ちょっ！？」

「大丈夫だよ、よく見てろ」

慌てるアルフだが、今の炎はイメージによって熱を持っていても「使い魔」が熱さを感じることがないようにイメージしてある。これによって何の問題もなく氷は溶けていった。

「これでよしっと。しばらく右腕は使わず、家でも少し温めるといい」

「あんた、変な奴だね。敵にこんなことするなんてさ」

と、アルフがいう。まあ、この先貴方は頑張る立場だし、むげには扱えんでしょうよ。

「さ、もう行きなよ。『今回は』俺の勝ちだ。これは諦めな」

「・・・・・・はい」

フェイトが頷き、空中へ飛ぶ。アルフもしぶしぶと帰って行った。

――カチ

再び、どこかで音がした。これは一体・・・？

「っ・・・！」

頭痛が増していく。これは、やばい・・・な

「一体どうしたんだろうな、俺の体は・・・」

『マスター！？マスターしっかり！』

「っく、悪いアリス・・・少し、ね・・・る」

俺の意識は闇の中へと溶けて行った。

……

・・・・・・俺は、いったい

「知ってる天井、だな」

月村家の部屋だ。いつも俺が寝ている部屋。起き上がると誰もいないが・・・どうしたんだろうか。いつもならすずかが潜り込んでいそうなものだが。仕方がない、忍さんにお礼を言って帰るか。部屋を出て広間へ行く。忍さんが紅茶を飲んでいた。

「あら、迅君もう平気なの？」

「ええ、まあ」

「なのはちゃんのフェレットを追っかけていて転んで頭を打ったとなのはちゃんが行っていたけど・・・どう？まだ痛む？」

なのはのやつ、どんないいわけだよそれは。まあいいや・・・

「ま、大丈夫でしょ。お世話になりました。帰ります。すずかは？」

「あの子は塾の時間なの、ごめんなさいね」

「なら伝言で『せっかくのお茶会ごめんな』と伝えてください」

「ええ・・・帰りは・・・」

「飛んで帰るんで」

俺が言うと、ああそうだったわねと思い出す忍さん。月村家は全員このことを知っているので問題ない。

「では」

「ええ、気を付けてね」

こうして俺は月村家を後にした。家に着くとドアが開いていた。

「おかしいな、鍵はかけたはずなんだが・・・」

リビングへ向かうと、そこにはピンク色の髪の女性が座っていた。

「誰だ！？」

「お久しぶりですね、私を忘れちゃいましたか？」

ん？この声・・・あ！

「あの時の天使か！」

「ええ、レナです。お久しぶりですね」

目の前に俺をあの世へ運んだ天使がいた。

しばらくして、お茶を入れる俺。

「で？何しにここへ・・・いや、どうやってここへ？」

「まずそのことから説明しましょう」

と、レナが説明を始めた。まず俺の転生について。俺が転生される時、レナの羽根をアテナが俺の身体に付着させていたらしい。天使

の位置を掴むことができる神は、それによって天使たちの場所を確認するらしい。なのでレナの反応が二つあればその片方の場所には俺がいることになるということらしい。さらにレナがここに来たのはぶっちゃけアテナの御使いということらしい。

「アテナ様が貴方の転生について、少々疑問を持ったのです」

「疑問？」

「貴方の力とこの場所についてです」

「この場所って・・・この場所は神様・・・アテナが提供してくれたんじゃないのか？」

「違います。アテナ様はそこまで介入する気はありません。そして貴方のこの力・・・アテナ様が思っていたのと少々違います」

「え？」

どういうことだ？

「貴方の力『創造』はもっと単純な思考をすることしかできません。炎を出す。水を出す。それらは簡単です。それは存在する物体であり、実際にイメージなのだから。でも貴方が使う幻想の力。それは今の貴方では本来使うことすらままならなかったはず」

「というと？」

「貴方が今持つデバイスや、仮面ライダーＯＯＯに変身する力。これについてはまだまだ先に力を理解しなければできないはずだと、

アテナ様は仰っていました」

でも、実際に俺は力を使っている。反動があったとしてもそれはただの疲労。力の遣いすぎだと思っていたけど・・・

「つまり、どういうことになるんだ？」

「わかりません・・・貴方の力がこの世界に来たことで何かの意思がそれを強くしている。そして・・・貴方自身が、何かの手の上で踊らされている可能性もあります」

「・・・・・・・・・」

つまり、俺がこの世界に来て、物語に介入したということはやはり最初から決まっていたこと？でもそれならどうして俺の力は・・・

「しばらく私もこの世界に滞在し、貴方のサポートをするつもりです。私もアテナ様に報告をする必要がありますし。しばらくは私もここにいることになりますが・・・よろしいですか？」

「ああ、構わないよ。俺はここに一人で住んでいるわけだしな」

こうしてレナがここに住むということが決定した。それにしても・・・

「なあレナ」

「はい？」

「この世界がアニメの世界である場合、その通りの物語でないと・・・

・何か支障はあるのか？」

「いいえ、ありません。アニメの世界はあくまでもアニメの世界です。この世界はそれに『限りなく近い』だけの並行世界であり、その世界がその通りに動くなんてこと多分ありません。世界とは『もし、もしも、もしかしたら、かも、だったなら』そんな風に世界は枝分かれしているのです。この世界もその一つにすぎません。だから世界に介入しようとその人の勝手なわけですよ」

そういうものなのか？ならなんであの時、変な怪鳥が出たり、イメージができなくなったりしたんだろうか？

「なあ」

「はい？今度はなんですか？」

・・・・・このことは、まだ言わないでも良いかな？

「いや、なんでもない・・・」

「そうですか。それよりご飯にしませんか？私お腹すいてるんですが・・・」

ああ、もうそんな時間だったか？あれほんとだ、7時だ。夕飯何も作ってないし・・・外食にするか？

「食事外で取ろうと思うんだけど、どうだろう？」

「いいですね、下界の料理はいつぶりでしょうか、楽しみです」

と、少し嬉しそうなレナ。とりあえずファミレスあたりが無難だろうか。そう思いながら扉を開ける。すると・・・

「お腹すいたよフェイト～」

「うん、アルフ・・・すぐご飯にしよう」

と、丁度お隣さんが帰って来たらしい・・・？って、あれ？

「「「あ」」」

3人の声が重なった。

03：「Ａｎｇｉｌ　ａｎｄ　ｂｏｙ」（後書き）

というわけでフェイトとの邂逅の話でした

新技

能力変化

イメージによって迅は様々な魔力変換資質を操ることができる。

炎熱　氷結　雷撃　疾風　水流　大地　光　闇のそれぞれを使いこなすことが出きる

瞬間冷却（Ｆｒｅｅｚｉｎｇ　ａｔ　ｍｏｍｅｎｔ）

読みはフリージング・アット・モーメント

相手を瞬時に冷却、その後一撃を放つことができる。大抵の場合これを喰らうと凍傷になること確実。今回は不発に終わった。

吹雪の吐息（Ｂｌｉｚｚａｒｄ　ｂｒａｃｅ）

ブリザード・ブレス

魔力弾発射口から冷気を発射して相手を凍結させる技

Ｎｅｘｔ「Ｂｏｙ，　ｔｈａｔ　ｉｎｔｅｒａｃｔ」

Settings（前書き）

ということで神谷迅の改めた設定です。
挿絵もあるよ！
活動コメでコメしてくれたかたがた感謝！

Settings

神谷迅
転生前　２４歳
転生後　　８歳
無印　　１４歳
身長　１６４センチ（無印）
体重　４０キロ（無印）
術式　不明
目の色　青翠
神の色　藍
魔力ランク　ＡＡ＋（無印時）
魔力光　藍
能力　創造（クリエイター）
イメージによって自身が創造した物を生み出し、実際に使うことができる。それは様々な物に置いて本人がイメージさえすれば存在概念を無視してその場に確立して生みだすことができる。

技
スターダストバスター
なのはのディバインバスターと同系統の砲撃。攻撃力は今のところアリスが未完成なのでＡ＋級の砲撃であるが、本来ならばＡＡクラスの砲撃となっている。

能力変化
イメージによって迅は様々な魔力変換資質を操ることができる。
炎熱　氷結　雷撃　疾風　水流　大地　光　闇のそれぞれを使いこなすことが出きる

瞬間冷却（Ｆｒｅｅｚｉｎｇ　ａｔ　ｍｏｍｅｎｔ）
読みはフリージング・アット・モーメント
相手を瞬時に冷却、その後一撃を放つことができる。大抵の場合これを喰らうと凍傷になること確実。２章３話は不発に終わった。

吹雪の吐息（Ｂｌｉｚｚａｒｄ　ｂｒａｃｅ）
ブリザード・ブレス
魔力弾発射口から冷気を発射して相手を凍結させる技

仮面ライダーＯＯＯ
迅がイメージによってＯＯＯドライバーで変身した姿。イメージの連動でＯＯＯそのものになるのだが、負担が大きく、現在の迅では反動が大きすぎて気絶する。

使用したら随時追加していきます

＞ｉ２５２２０｜３２９２＜

絵はＡ’ｓ後からＳｔｒｉｋｅｒＳまでの絵のつもりです。ぶっちゃけ言うとポニーテールだったのなんて今まで考えてなかったのですが、なのはのキャラで男でポニーテールはどうだろうかということで採用。
デバイスも剣の元はソードライフルです。他キャラも書き終え次第書きます

Settings（後書き）

というわけで！書いてみました！
前々から書く書くとかいいながら書いてなかったので！
本編もよろしくお願いします！

でわ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1327t/

魔法少女リリカルなのは〜神様の力を得た少年〜-Ｒｅｔｕｒｎｓ-

2011年6月6日01時42分発行